July 1891
No. 272

女學雜誌

第二百七十二號
明治二十四年七月四日發兌

武道辨
いよいよ妙機に接するの心地する。

新作小說 流れの葦　是空子

ミルトンの詩
前回に接し「コマス」の靈趣を寫す。

下六番町六番地
女學雜誌社

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 272 JULY, 4TH. 1891.

EDITORIAL:—On the Warlike Accomplishments.

NOVEL:—Nagare no Ashi." (Zekushi.)

CHILDREN'S COLUMN:—"Little Lord Fauntleroy." (A Translation.)

MISCELLANEOUS:—My Friend. The Writers of Today. Parting. Bewilderment Miss Yu Masuda.

CRITICAL NOTES:—"Woman's Thoughts and Ideas." (1) Specimens of Lady's Letters, etc.

LITERARY:—Milton's Poetry. Japanese Poetry.

CONTRIBUTED ARTICLE:—Life of Matsuoka Tsuru.

HOUSEHOLD:—Sympathy. Maids.

CRITICAL NOTES.
NOTES AND NEWS.
QUESTIONS AND ANSWERS.
CONCERNING WOMEN.

第二百七十二號目次

社說　武道の嗜(下)。
小說　流れの蘆(是空子)。
兒籃　小公子(若松しづ子)。
隨感　我友(ひさご)。
雜錄　現今の文學者(雲峰子)●送別(其一)みどり●(其二)(方寸子)●(其三)思ひ亂れて絲の如し(川合信水)●増田勇子。
批評　婦女詞藻第一編●女子消息ふみかきぶり●時政論考●史海、藤原鎌足●亞細亞。
文學　ミルトンの詩に就て(二)雲井春香●和歌。
寄書　松岡小鶴女史傳(中川恭次郎)。
家政　いたはろさ云ふ事●下婢
時事　教育家は位階を要せす●伊藤伯、●大隈伯●信書秘密●政風針●安息●時事新報●北海道●農科大學
女報　さまぐく
週報
物價
附錄　日本全國卒業女學生姓名一覽

女學雜誌社出版書目

書名	著者	冊數	價
つれづれ草講義	鈴木弘恭大人述	一冊	價金八錢
文法口授	鈴木弘恭大人述	一冊	同十六錢
百人一首講義	鈴木弘恭大人述	一冊	同三十五錢
産婦小兒攝生法	船越鼎太郎君著	一冊	同十六錢
ひめ鑑	關輪正路君纂	一冊	同四十五錢
善惡之岐	中島俊子者	一冊	同卅五錢
婚姻論	横山雅男君著	一冊	同十六錢
廢娼演說	島田三郎、植木枝盛兩君演說	一冊	同五錢
妓樓全廢	巖本善治述	一冊	同五錢
公娼可滅	島田三郎、巖本善治同著	一冊	同五錢
植物學	農學士寺尾熊三著	一冊	同十二錢
昆虫植物金石採集法	林學生星野愼著	一冊	同十二錢
和畫手本	明治女學校教師八木兼辰著	四冊	同一圓
演說著作材料	女學雜誌社編輯	八冊	同四十錢
鐙子小傳	巖本善治著	一冊	同八錢

下六番町六番地

女學雜誌社

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌第二百七十二號
明治二十四年七月四日發兌

社説

武道の辨

（三）諸藝の精神

世故に經歷したる老人の曰く、一藝に達するものは皆な道を談らふべしと。蓋し、藝の奥は悉とく道なるがゆえなり。相撲を業とするものも、信仰の念篤からずば技に上達するヿ能わず、たとひ山を倒すの勇ありとも、德を立てずんば大關となるヿ能わずと云へり。俳優の徒亦た然り、心に何ものをか確信し、舞台に上る時、一念を凝執するの目途なくば、情け協わず、演技眞に迫らずと云へり。力を角べ、裝ほひを飾るヿを旨とするものも、其堂奥に入るときは、皆な一つの道德を要す。此の本尊に歸依して道念を固むるにあらずば、遂に其技に妙達するヿ能わずと爲す。

茶を敎ゆるものは、茶道と云ふ、茶の技とは云はず。抑そも茶道の主旨たる、五躰を定め、丹田を沈め、坐地客に對して尤とも宜しきを得、四肢の周旋毫末の隙間なきヿを本意とするにありて、道の精神たる、膽を練り、心を落付け、情を制するの工夫を自得するにあり。湯加減の冷温を許し、茶の濃淡を味わふが如きとは、抑そも其末なるのみ。

禮道を敎ゆるもの亦た斯の如し。禮の文は態の宜しきを得るを專一とし、人と和らぐヿを以て其主用となす。扨て、態の宜しきを得んが爲めには、さま〲に身風を直し、式作法の心得を學ぶ。左れど身態の尤とも美なるは、心の美、表てに發するの時にあり。此を以て、急激に處して驚ろかず、卒然無禮に會して怒らず、不斷綽々として温雅の心情を有つヿを最上の主意とし、之あらんが爲めに先づ躰を練り風を正しふす。然れども若し外形の式に止まりて内心の禮に反らずば、三千の威儀を學び了りたりと云ふとも、禮道に於ては未だ寸毫の光を窺はずと爲す。

歌を詠むもの亦た之に同じ。歌に詠歌、歌道、の別あり。歌道には誠意誠心を旨とし、思ひに邪なきの心得を第一とす。情を矯め、辭ばを飾りて、口に靈音を吟じ出すは、譬へば、狼の羊の聲に倣ふが如し。景樹翁の歌に、

天地の動く調べを尋ぬれば心の奥の峯の松かぜ
カーライル之に名けて、心裏最奥の清泉とは云へり。而して、歌道の修行とは、人此の天眞を確守し、事物に臨みて其心を動かさゝるの工夫を養ふにあり。花に歌ひ、月に嘯ぶくの時、心澄みて僞りを映じ出さずば、人則はち歌道の奥に達したるなり。卒然題を得て心惑ひ、倉卒として爲す所ろを知らざるが如きは、歌道の膽の未だ練れざるなり。歌を詠むものは、此歌道を得ることを本意とし、心、ポエチカルとなりて、事に臨み卑劣の肉情を發せざるに至らんことを要む。句を列べ、調を合わするが如きは、その末技なり。

大凡そ此類の諸藝、其窮極する所ろに於て遂に大道に觸れずと云ふものなし。我國從來、儒教佛教の久しく人心を感化するものありしとは云へども、其影響する所ろ多くは學者の間だにして、文字なき人々の内に流行せしこと甚はだ薄かりき。左れど、人十年文字なきことを得、一日も道なきことを得ず。此を以て、道念の理想さまぐの形ちを以て發表し、もろくの藝に附して其活力を動し來れり。我國舊來の諸藝が、多くは高尚なる道の極意を存して、たえて器械的に沒落せざりしの由緣、一に此邊に存すとこそ思はれたり。

武士は、今のゼントルマンにて、人のうちの花なりける。而して、其教養は多くは武を以てせり。夫れ、他のもろくの樂しみの技すら、與に高尚の道德を存すること甚はだ多し、况んや、武士最上の教養に於ては、之に靈妙深遠の修身教を凝めたること、固より他の藝の及ぶ所ろにあらず。武士が身を殺して仁を爲し、節を守りて難に死し、弱きを助けて強きを挫くなどの美德を立て、東洋の勳爵士となりて我國の封建時代を飾りたる所以のものは、武の教養の能く此の大道に叶ひたるが故にあり。而して此高尚なる教養を、武道の教とは云ふ。

（四）　武道奥妙

武術の師匠、一生の秘傳を其門弟子に授くるの時、弟子を擇ぶに、其藝を以てせず、其德を以てす。何んとなれば、德の立たざるものは、遂に武道の極意に達すること能はざれば也。武道の極意とは、即はち德あるがゆゑ也。

武の藝に教ゆる所ろのものは、躰を以て心の奴とし、心の命のまゝに躰を使役し、心と躰と同化して、五躰悉々く一靈心裏に融混するの妙地に到ることを主旨とす。此に到れば、心、

躰の故を以て騒がず、躰、心の外に惑わず、心胸つねに洞らかにして、全軀皇々如たるを覺ゆ。白刄の下にありとも、動かず、水火の中にありとも動かず、辨難攻擊の中にありとも動かず、艱苦百來すとも動かず、不動の態完備して、而して靜中に動兆し、瞬時開路を發見して、巧みに其方向を認たむるの工夫を生ず。武藝の妙こゝに到りて則はち武道の精神に達す。

柳生流の兵法に曰く

氣は心の僕にして物毎に先達つものは氣なり、五臓六腑に氣を滿さんと欲する時は、ア、ウンの息を詰て意地を含む時は躰氣充るものなり。引く息は陰なり、出る息は陽なり、陰の息を胎内に籠めて丹田に收め、臍下の心と一致すれば、天地陰陽合躰と云ふものにして是を不動の神躰と云へり、丹田臍下に氣を治めて陰の息の内に陽の息を萌し五躰を何如に動かせても心氣臍下に在て慢に動かざるをこの本意ありと云ふ。

起倒流の兵法に曰く、

柔にして剛を制す、我力を捨て敵の力を以て勝つ、然らずして我力を頼み力を出す心あらば勝利全からず、形は敵に從て變化する共、吾心不動にして靜正なる時は全く勝利を得べし、强て勝利を求ると云ふにはあらず、即はち不動心の事なり、心裏虚々にして神氣不動の形を指て本躰と云、敵に對するに爰に敵ありとの念起る時は動ずる者現わる、動ずるに至て一身空し、敵と見て然も心不動、虚々にしてやすく對する處本躰備る也、之を本躰の不動智と云ふ、神氣不動にして敵に向ば、敵氣を呑れて迷ふ。

夫れ斯の如し、事に臨みて心を動かさず、物に接して躰を亂さず、能く眼前の實景を見留めて、處すべきの工夫を考ふるを、武の藝の主旨となす。此の故に、劒を擊つの修業には、擊たるゝことを憂ひずして、大刀すじの見えざるも不可とす、又た柔術には、倒るゝことを損とせずして、敵力の方向を辨ぜざるを恥とす。必竟皆な心を靜めて敵を認ため、時に處するの最良工夫を瞬時に決するの覺悟を養なふものにして、要する所ろ、躰を以て心の僕とするに過ぎず。神道一心流の歌に云く

兎に角に我身を敵と心得て我身にゆだん透間あらすな

三

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

水鳥の足もせはしく働らけど心静かにあそぶあらなみ

又た、劔道秘傳、さとりの歌として名高きものに云く、

筑波山葉山繁げ山しげけれど木の間木の間に月かげぞ漏る

劔術を何にたとへん岩間もるつゆのしづくにうつる月かげ

事物に接して油斷なき人の覺悟は、木梢をてらす月光の、ちとの木の間をも漏すことなく、一輪全山を照らして寸隙の間も直ちに白光を射透するが如く、亦た潑剌として飛散する万千の水珠、忽まち飛びて忽まち消ゆと雖ども、月光は一々之に映じて遺す所ろなきが如し。

されど油斷せずと云ふは何不可也、油斷せじと思ふにはあらず、思ひ自づからにして油斷せざるなり、八面玲瓏として心眼八方に照り、肉目眠むると雖ども、天地明らかならずと云ふことなし。此に至れば、全身常に閑にして、百躰、寸處の隙なく、終始靜かにして靜中に動流漲ぎり、日夜空想無念にして、何の時も應敵の準備なきことあらず。之を武士平常の心念とす。如此きは即はち、心と躰と一和し、心大安心を得て、躰軀之が爲めに自由に使役せらるゝに因る。故に、たとひ、武藝を修めずと雖ども、早く此大安心を得たるものは、すでに武藝堪能の人と同様の覺悟を得たり。禪僧の中此類多し。

(五) 文武不二

則はち知る、文武到底一なることを。夫れ、知識を得て、人の道を知り、天地に居て吾等が進むべく取るべきの方向を決するは、學文の要にあらずや。宛がら是れ、劔を提さげて敵に臨み、其の間處を發見して、進入するに異ならず。

われは天下の智識を見たり、智識到底異なることなし、日の下に古來年々新らしきことあらずとは、古への詩人が世相を感じ、大悟して吟じ出したる所ろの句にあらずや。學問の示す所ろ果して何如に、一身を献げて他の爲に犠牲たるは即はち其當然の進路なり。文道の敎ゆる所ろ之に達せずは、遂に未だ可ならず。

武道の敎ゆる所ろ亦た此に極まる。百人に敵するの武術ありとも、二百人の敵來らば死せざるを得ず。十人を擊つの能ありとも、二十人に向わば、何をもて擊たん。されば、敵に勝つことを以て武の奥意とするものは、遂に總ての敵に勝つことを得ざるなり。寧しろ先づ身を敵に與へ、自ら死して而して活るには如かず。經に云く、仁者に敵なしと。又云く、肉に於て

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

死するものは、道に於て活くと。武道の極意此に到らずば、遂に未だ可ならず。

文武兩道の窮極する所ろ到底一のみ。たとへば、表裏相合ひ陰陽相協ふが如し、横井小楠は云く、

本朝中古爭亂の時に當ても有識の將士は權謀智術强勇のみを以て衆を服し國を治むるに足らざるを悟り心を雨矢霰彈の中に治め膽を千槊万刀の下に練り自から反して己を脩め人を治むるの方法を工夫自得せる故克く開國創業の功を成し或は輔翼賛成の勳を建たり是れ尙武の本意心術に在て技藝にあらざる所以なり古人が武を學んで文なる事如此し。

藤田東湖、弘道館の記を筆して、文武不岐の理を辨ず、云く

文武の道各大小あり、天地を經緯し、禍亂を克定する是れ其大なる者なり、書を讀み册を挾み劍を擊ち矛を奮ふ是れ其小なる者なり、然れども書册は道義を講ずる所以、劍矛は心膽を錬る所以、心膽實し而して后ち難に臨み、變を制すべし、道義明らかにして而して后ち以て己を修め人を治むべし、文の弊や弱、武以て弱を矯むべし、武の弊や愚、文を以て愚を醫すべし、分つて二となす其一を廢すれば不可なり。

孔子云く、文事ある者は必らず武備ありと。昔しは、敎えに文武を兼ね、其一を偏廢せざりき。希臘羅馬の敎育亦た然ありきと云へど、基督敎の行はるゝに及びて、武育を廢しぬ、蓋し基督敎の極意は武道に均しく、其信仰に達するものは、別に武藝の修錬を要せず直ちに堂に入るとあるを以ての故なり。たとへば禪定の人自づからして武道に適ふが如し。

維新以來、武育を偏廢して、單り文育に走り、文育中、宗敎献身の分子を除きて、只管ら利己利慾の主旨を開發す。子弟此を以て日に惡化し、節義廉恥の風廢れ、仁に先して道を樂しみ、人を愛して自から傷ふの美德殆んど亡せたり。志士の膽は豆腐よりも脆ろく、壯士の情は水よりも淡し。吾人は古への武士を慕ふ、封建の勳爵士をぞ慕ふ。

(六) 武育

文武一のみ。然れども、智を得るは文に如かず、膽を錬るは武に若かず、其二つを併せ用ゆれば、敎育の術極めて容易く、効驗を得る所ろ甚はだ大ひならんとす。而して、宗敎の信仰に達するにも、若し武藝の修錬を用ひて之を補ふときは、靈の

進歩著しるしく速やかならんとす。嗚呼われ困苦の人なる哉、此の死の躰より吾を救わんものは誰ぞや。死の躰をして心の僕とするものは即はち武藝なり。

特に性來文に偏し易く、武備を欠くとの就中過多なる女性に於ては、武道の教育を要するは、一層切なり。女子を教育するに當り、當路者を苦しむる所ろのもの澤なり、之が爲めに千々に心を砕けども、女生の習慣久しふして化せず、教育者をして暗涙を潜へしむると幾回ぞ、而して此類の舊習慣は、武邊の教育を以て思の外容易すく打破せらるゝとを經驗す。女生は之が爲めに凛然たり、而して優雅の貞を増しぬ、守る所ろ嚴然たり、而して情けの温たかきを加ふ。見よ、尤とも強くして尤も優しかりしは、古の武士にあらずや。武育が女生に於けるの感化亦何を以て之に異ならん。吾人は、女子教育者が奮つて武育を其校内に隆んにせんとを勸告す。是れ吾人の空想にあらず、驗知して而して後ち斷定する所ろのもの也。

小説

流れの葦

是空子

（一節）墳墓

夜ならぬに鎖せし雨戸の隙より、微かに燭火見ゆ、天氣滯みて晴れ渡らねば、日光も尚ほよその光を引出すなるべし。胡蝶二つ打戯むれて石塔の上に飛び、下に白骨を瘞するを知らず。新たに葬むりし壙土未だ乾かず、涙を以て沾せしなるべし。僧、裳を搦げて木を割る、斧を揮ふて殺生の心地はせず。門前草生ひて、犬眠り、筧の水遙かに到來して久しく壺中に留まる。花を賣りたる老婆去年身まかりて、代るものあらず、孫は院に仕へて厨の業を爲す。

僧は暫らくして腰を延し、打たゝきて息ふ樣あり、復た初じめんとして、フト考ふるものゝ如く、斧を持ちしまゝ二歩三歩此方に來りしが、又元の所ろにかへりて斧を木に寄せかけ、緩やかに椽側に居寄りて、煙草盆に手を當てたり。舌うちして、立かけたるが、又坐して枯聲一つ二つ、知空、知空、と呼はりぬ。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

賢こ氣の童兒、まめやかに趨り出で、前掛にて手を拭ひつゝかしこまる。師の樣姿を見て、未だ命あらざるに、ハイ、と應へ、直さま煙草盆を持ち行きぬ。

嘯ぶきて煙の輪の消て行くを見屆け、力なげに顧みて重々しく、云く、…茶。

聲と共に立ち行くを、やと呼びとめ、

　左樣、湯の方が…、イヤ矢張り茶、ぬるくしてナ。

呑乾して肩に皺よすれば、童兒は掛念顔して心を配る、師の坊、餘りぬるく候ひしかと打笑みつゝ問ふに、イヤ、よろしひ、が、よく沸かして置けよ、今日も亦た大山のお姫樣だちがお出であらう。

　知空、疑堂さんはどうなされたか、そうか、又いつもの坐禪か、それでは木を割る音が八釜しかつたらう、然しモ少し遣らなきや成らぬ。

緣より立つ腰をさゝへて、御用心といたはり、數歩ふみ出すうしろ影を見送りて、知空は厨に入りぬ。鷄、彼方に鳴く。聲、八つを知らせて乍ち牝鷄を呼ぶは、知空が例の如く、あらい流しを與ふると見へたり。木を割る音丁…丁。深山ならねど、さびしさは同じ。住ふ人のさびしと思ふにはあらず、景色のさびしげなるのみ。

地は高けれど、かくれてさびし、此を以て谷中と云ふ。下に目にあまる圃を見渡し、前に空を衝く巨木、風塵をとゞめて濁世を區る。車稀れに人少なき街路を更に三丁入り、破れたる門來る人を防がねど、詣づるもの最とも少なし。

本堂は形の如く、佛壇いかめしく、經とゝのひたりといへど、晝、鼠の走るにまかせ、猫は主人が午睡のあとに伏して人の閑多きに倣ふさまなり。本堂に隣り、裏手一面の遠景を望み、直竿千餘の高籔を袖にして、疊七つ八つを包める、茶室めきたる坐敷あり。晝ながら雨戸を閉しぬ。

木を割る斧の音、時つぐる鳥の聲をよそに、茶室の内、一きはうちしめりて靜かなり。朝たの雀未だ歸らずして、竹に、親しみの囀づりあらく、夕方のそゝりありきに伴する犬尙ほ眠り、窓下に例の慰さむるものなし。室内に人ありや、あらずや。沈々として聲なし、氣息もなし。たゞ僅かに燭火の隙間より漏るゝを認たむ。

やゝありて、ガラリ、雨戸を開くものあり。敘むろに半身を

七

出して、目途もなく表をながむ。眼、沈み、相鬱し、色の動かざるは、刻める石像に似たりける。

斧を杖に、後方を顧みて僧は少しく打笑むに、窓上の人はうなづくのみ、ことゝもせず、口を開かんともせず、將に他に向はんとすらん。

疑堂さん、お考がへが着ましたか、何んぞ面白い。

眼を定め、暫らく見つめて、やうやく口を開く、言語少なくして、極めて重し、

イエ。

僧は倘ほ押かへし、

今晩は、一つ伺がいたいものです。

窓上の人、うたゝ煩らしと云ふ氣色にて、

ハア。

時に車三輛、門前に着す。昨日來し車二輛の轍のあと、今日伴を得て、例しなく路の表てにぎはし氣なり。犬、驚ろきて起つ。左れど久しく眠りたれば、不平のさまも見へず。ノソリ、ノソリ、門を入りて躰を延し、僧に向ひて注信す。

僧は裳を下ろし、少しく出でて迎ふ。後ろの戸は閉ぢて、茶室の人反つて歡迎せず。

三十路あまりと見ゆる老女は、お附にやある。十七八と十三四の姫達は、先刻、主の僧が物語りし大山家の人か。身づくり、やうすの太はだしく相似たるは、姉妹あることを證す。左れど、氣質の相違ふ所ろは、一見してすでに明けし。

知空は甲斐々々しく、水を酌み、花を調のふ、煎香の煙、結べる糸の如く、あたりをまとふ。僧は本堂に入りて讀經の用意す。詣でし人々は知空を隨がへて、彼の新らしき墓へと向ふ。

ウバや、之を見るにつけ、今更らそちの心が推せられ、悲しく思ふぞよ、昨日、妹が歸りて云々との物語りに、切めては死後その御墓になりと自由に參らせなば、また心のなぐさめにぞなりなんかと思ひ、今日は妾わの所望として來つるぞよ、喃よし子さん、此の後はあなたも度々ウバと御一處に來玉へかしと云ふに、老女はヨヽと泣き、お孃さまのいつものおやさしさ、さるにても斯く迄御心ふかく妾わ不憫のことを思し玉ひ、左なきだにお弱き御躰、もし御病氣にても出でなば何

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

如にせん、與さま御逝去の后は、何かにつけ御心をき多きおなたがた樣の御苦勞を、せめて少しなりともウバが御介抱申上んと、勿躰なき申分ながら、アナタ方さまを吾子のやうに思ひまして、トント、昔しの事を忘れて居ました、然し親はなくとも子は育つと、世間の人に持はやされ、親は入らぬと言はるゝが苦しきうちの慰さめにて、吾子は丈夫に育つことをと、安心して御奉公いたして居ましたが、世上の道理も空だのめ、つい此樣になりました、死ぬる間際には、私しの事を申しましたとか、鄰の人が昨日も來て話されました、良人もさすがに情に屈し、一時は召びかへさんと致たしかけましたそうなれど、常ねの氣性は容易すく、曲げがたく、涙ながらとふ〳〵首を振りましたとの事、お孃さま、御推察下さりませ。

姉の君は言ふ迄もなし。知空も少こし隔たりて首べを垂る、手桶の水の切りに動くは、身を振はすあるべし。妹の君も打しめりて聞き居玉ひたるが、フト胡蝶を見て、氣轉じ、靜かに追ひゆく。

此樣を見て、姉は氣の毒に思し玉ふなるべし。ウバはほゝえみて、身を延し、とまれる蝶よ、しばし待て、それお孃さま、モ少こし、と言はぬ斗りに手をあぐれば、正に捕はると見へし蝶、ヒラリと立つて、双々、兩々、翩々、交々、宙に飛んで戯むる。

チヤ、しまつた。

姉の君は扇をかざして打笑ひ玉ふ。知空も可愛氣に、身をつつしみて、うちえむ。笑ふうちに禮あり。

サア〳〵、お孃さま、飛んだお話しで遲くなりました、お住持さまが、お待かねでせう、

と參らんとするに、姉の君は、しきりに彼の茶室の方を打ながめ、物案ずるさまなり。今しがた雀二つ、飛び歸りて、囀づる聲す。姫は之を聞き玉ふか。妹の君の亦た窺ひ寄らんとするを引とめ、物思はし氣に、

好さま、御覽ぜよ、あの睦まし氣なることよ。

數〳〵の思ひの竹の節に居て、
　心もなげに鳴く雀かな。

本堂にあたりて鐘の音きこゆ。茶室の內、朗々として、詩を吟ずるの聲あり、音滑らかにして、利く、麗らかにして、す

いし氣なり、耳をそばだてゝ聞けば、ゲーテがファウストの英譯の詩を誦んずるものか。姉の君は、きれ／＼の聲を聞きつけて、心に、兼て讀みし彼の詩の冒頭を想へば、

噫！われは理學、法學、醫學を研究したり、而して神學の蘊奥を究めぬ、斯くて燃ゆる如き熱心もて黽勉したり、されどわれの愚鈍なる昔しに變らぬを見る、のちわれ！益なき學問ありと雖も、われ初めより賢くなりしを見ず、校內に於ては人のあやしみ又ほこる所たり、先生、博士と稱せられて過る十年間、學生の信條を導きつゝ、巧みなる言もて己が心のまゝに彼等の說を左右したり、而して今となりては天地間の奧妙得て知べからざるを感じぬ、此の感じこそ燃ゆるが如くわが心を惱ますものなれ、われは世に博士、著作家、僧侶、理學者などと稱ふる萃々たるものに比較せば、思念遙かに鋭敏なりと信ず、われは學術と稱ふるものゝ深みを探りたり、われを苦むる者は良心にあらず、疑惑にあらず、われはまた地獄、惡鬼を懼るゝものにあらず、されどわれは全く心の安全を失へり、昔てはわが知りし事、また知りしと思へる事は今更、虛しくも又た眞ならず見えぬ、他日志を得ば、われ人を救へもし、高めもせんと希望せし事も今は完く消え失せたり、斯くて學びの道の唯一の娛樂を奪われ、領分も、位階も、實も、今は浮世の花樂一つだになし、假令われ犬たらんも、如何でか斯くて生き存ふべき。

兒藍

小公子。

若松しづ子

第六回（丁）

フォントルロイどのも少し遠慮氣味で、彼の革命の話しに又深入りしない中に中餐の時刻となりました、セドリックは席を離れ、お祖父さまのお側へ行つて、彼の痛處のあるおみ足を眺め、大層慇懃に、

お祖父さま、僕が少し手傳て上ませうか？僕に寄り掛つて入つしやいな、先に子、ホッブスさんが林檎の樽が轉がつて、足をけがした時、僕に寄り掛つて步るき升たよ。

お側に居合せた丈の高い給事は、思わずホヽ笑て、危うくしくじる處でした。此者は上等な華族方のお邸に計り遣われて、殊

に上品な給事で、決して殿方の御前などでホヽ笑むなどの失策はしたとのない方で、假令何事か出來しようとも、自分の分限を忘れてホヽ笑といふ樣な以ての外の振舞があれば、それこそ大層な耻辱と平常から覺悟いたして居りました、然るに此時こそ危うき處を漸く免かれましたのは、侯爵さまの御頭の丁度上當りに、甚だ醜い畫像の有つたのを外眼もふらず見詰めたお蔭で有つたのでした。侯爵どのは、大胆にも進んで用立うとした小息子を頭から足まで見下ろし、雜白に、

貴樣出來るとおもふか？

マア、出來るだろうと思んです、僕、きついんですもの、モウ七歳おんですもの、あなた片ッ方は其杖をついて、片ッ方は僕にお寄かゝりなさいな子、アノヂックもそういつたんです、僕はたッた七ッにしちやあ隨分骨があるつテ。

此時セドリックは手を握り、肩の上まで持つていつて、ヂッークが賞めたといふ力瘤を侯爵どのにおめに掛けましたが、其顏が餘りにまぢめで、一處懸命なので、彼の給事は又前の額面を一心不亂に見詰ました。

よし！そんならやつて見い！

と云われて、セドリックは先杖をお渡申し、それから侯爵さまの席をお立になるお手傳をし始めました。平常は給事が此役を務めまして、御前のお痛處が普段より御困難の時分などには、隨分烈しいお言葉を頂戴いたしました、侯爵さまは決して入の氣分を損ねるなどを厭ふ方で有ませんかつた故、近侍の人々が御氣色に依ては恐ろしさに内々震へる樣なとが有ました、然るに此時は御足の痛の烈しいにも關はらず、一度も鳴らせ玉はなかつたのは、一ッセドリックの力量だめしをしやうといふ企が有つたからのとでした。先づ靜かに坐つて勇ましく進めたセドリックの小さな肩に、御手を置玉ふと共に、セドリックは痛處のあるお足に觸れぬ樣注意して、自分の足を一歩前へ進めました、そして侯爵さまを慰めて威勢をつける積りか、

僕、靜に歩き升からね、ズット寄掛つて入つしやいよ

といひました。侯爵どのは平常此通りに歩行し玉ふ時は、お側でお手を取る者の方に御躰を寄かけて杖は態と輕くつき玉ふと故此時も其通りにして、充分力量をためさうとなさいました故、隨分セドリックの爲には重い荷で有たのでした。數歩

行く中にセドリツクの顔は大層熱して來る、胸はドキ〳〵しましたが、シツカリ踏占て、チツクに賞られた骨組のとを考へて、息を切り

あなた、かまはず、僕に寄り掛つて入つしやいよ、アノ……余んあり……あんまり長い途でなきやア、僕大丈夫ですよ。

食堂までは左程長い間では有ませんかつたが、セドリツクには、食卓の頭の倚子へ來る迄隨分の途のりに思はれました、肩に載せられた手は一歩毎に重くなり、顔はます〳〵赤くます〳〵熱く、息はいよ〳〵忙はしくなつて來ましたが、止めやうとは決して思はず、首を擧げ、筋を張つてちんばの樣に歩む中も老侯を頻りに慰めて居ました、

あなた、立つていらしやる時、大變足が痛いですか？、アノ湯に芥子を雜ぜた中へ入れて見たとがありますか？、アーニカつていふ物は大變好いつてチ。

といひました。彼の大犬もソロ〳〵側に歩るき、給事も跡に從つて參りましたが、小さな形のセドリツクが勢一杯の力を出して、心よく重荷を負ふて行くのを見て、妙な顔付をしてる、又侯爵さまも眞ツ赤になつた小さな顔を流し眼に御覽ふじて、是も意味あり氣なお顔でした。食堂へ軈がて來て見ると、是も又立派な廣間で、侯爵さまの御着座になろうといふ倚子の後ろに立つて居た給事は、チロ〳〵セドリツクを見て居りました。それでよう〳〵倚子の處まで辿りつき、御手は漸く肩の上から下り、侯爵さまは無事に御着坐になりました。セドリツクはチツクのハンケチを出して額を拭ひました、

どふも熱い晩ですチ、あなたは足が痛くつてそれでアノ火が入るんでせうが、僕にやア少し熱いんです。

セドリツクは侯爵さまの周圍にある物で餘計なものが有る樣なとを申して、御機嫌を損てはと氣遣ひました、

貴樣は隨分骨を折つたからだろう、

といふお言葉に對し、

ナニ、そんなに骨が折れやしませんかつたがチ、すこしあつくなつたんです、夏になればだれだつてあつくなりますは。

といひながら例のはでやかなハンケチで頻りに汗で濡れたちゞれ毛を拭ひました。セドリツクの坐はお祖父樣の眞ん向ふ

で食卓の向ふの端でした。其椅子は臂掛のあるセドリツクよりはズツト大きひ成人の掛ける椅子で、其外これまで眼に觸れた一切のもの、天井の高い廣間の數々を始めとして、置附の道具も給事どもも養犬も侯爵どのまでも實に柄の大きなもの計りで、セドリツクはます〳〵自分の小さなのを感じ升た。併しそれが決して氣になりはしませんかつた。セドリツクは自分が大した人物とも、えらひ人とも思つたヿが有ませんかつたから、コレはと少し臆せる位の物事にも自分から務めて慣れて見ようと思つて居ましたが、今食卓の一方の大椅子に坐つた處は實にこれ迄になく小さく見えました。侯爵は一人住ひでこそあれ暮らしむき万端中々大したもので、殊に好食家の方でしたから、膳部の調方なども隨分八ケま敷いものでした。セドリツクは立派な玻璃器や皿鉢のきら〳〵して、慣れぬ眼には瞬ゆひ樣な間から遥かに侯爵の方を見て居りました。さて大廣間に制服を着た丈の高い給事どもに侍づかれ、光り輝く數々の燈火や、輝めく玻璃や白銀の器具を列らねて、上座には武しひ老貴人が坐を占めて入つしやる、遥か下つて大椅子にチヨンボリ腰をかけた誠に小さなセドリツクを見るものは誰もおかしく思ひませう。食事といへは、他に處在の少ない侯爵には中に容易ならぬヿでした。それのみか御前が普段より御機嫌か好くないとか、御食氣か進まぬとかいふ時には、料理人までが色を失ふヿがありました。然るに此日は調理の風味鹽梅の外に御心に掛させられるヿが有つた所爲か、御食氣も平常よりはいくらか好い樣でした。その思ふて入つしやるといふは、他ではない、即ち孫息子どのゝことで、始終眼を離さずセドリツクを眺めながら、自分では格別何も云はず、どふかこふかしてはセドリツクに話をさせる樣に持かけて居られ升た。是迄は子供に話をさせて心遣りにするなどゝは思もよらぬヿでしたが、さてセドリツク丈は合點の行ぬ樣な處もあり、又面白い處もあり升たから、どの位の度胸を堪忍があるものか試ふ計りにおもひ切つて少さな肩に自分の身を寄せかけて見た處が、セドリツクの少しも狼狽しなかつたヿと爲始たヿを止るといふ樣な景色が一向に見えなかつたヿを頻に思ては、滿足に堪れませんかつた。フォントルロイはいと丁寧に、

あなたは始終冠を被つて入しやらないんですか?。

老侯は例の澁ぶそふな笑を見せて
イヤ、おれには似合はないから被つて居ないのだ。
アーホツプスさんが、いつでも被つて入つしやるんだといひまして干、又考へ直して、イヤそうじやない、帽子を被ぶる時には脱ぐんだろうといひ升たつけよ。
その通りだ、時々脱ぐんだ。
と老侯がおつしやるとお側に居つた給事が急に脇を向いて、口に手をあてながら、妙な咳嗽をしました。

隨感

我友

ひさご

降つゞきし雨はれて心地よく晴し午頃、かねて契りおきし友の宿をとふ、友はとくにしたくとゝのへて待うけ顏に出迎へぬ。學校出てよりさきにもまして親く成し友六人あり、これらは皆姉妹も及ばじとむつみあへれど、中にもおのれ家に姉妹なければ、これらの人を、したふ事限りなし。この日とひし友も其中の一人にて姉妹なき人なり、同感てふ事このしたしみにそひて、荻の上風のそよぐにもこの友の今いかにしてか、淋しからずやなどおもひやり、花の木かげ月あかき夜に樂しとおもふ事ある時もこの友とこの樂しみともにせぬをあかず思ふ。此友は孔子の婉娩聽從といふむねによくかなひたる人なりとて從順のほまれ高き人なり。されど、時として非理の事に當る時はいかでかくはとおもふまで、あく迄も我意を通すことおのれのとても〱及ばぬ勇氣あり、かく謹愼なる人なれどこの日はいかでかく遲かりしと侘しげにいふ。時は契りしよりおくれねどこゝよりさして行所あるをもてともにつれ立あゆみ出し道すがら、常にあるまじく、おしとく、いそがしげに一人ゑましげにして行。この友常にかなしき咄し嫌らひ成といひてしゐて笑顏つくれど何となくくもりあるやうにみえしがこの日は晴わたりし青空にて、爽かにみえぬ。其心おもひやりておのれもおしをはやめ、さしてこし敎會につきぬ。入たてばヲルガンの響き耳に淸みて天女の舞うたふごとく、なみゐる人皆おさな子のごとき顏して心よげなり。何となくいひしらずおのれも其の群にあらん事うれしく、身をかへて生れ出し心地しぬ。さだめの事ども果し後、この友呼ばるゝ聲にしたがひて席につけば、銀の鉢に水もりたるを

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

側の人にもたせて牧師はしづ〳〵と友の側へ近づきぬ。この時あたり靜肅としてこの禮うくる人をはじめとして鼻かみわたす聲より外に音なし。おのれ夢の心地して見てありしが、涙のはふり落るにておのれにかへりぬ。何によりてこぼるゝにやしらねどかなしきやうにうれしきやうに涙制しあへで。その後の事はよくもしらず、躰かたく成て又われかの堺に入ぬ、しばしありて耳を貫ぬくごとき聲聞えしは我罪をあらひてと人々のうたふなり。おのれおどろきおくればせに立て雪よりも白くせよなどふるへる唇よりうめき出しとき、われながら、靜心なく胸安からざりしを、たしかにしりぬ。この事はてし後又ともにかへるに、友はまへにゝずつねよりも心安すけくしづかにかつかたりかつあゆむ。遠からぬうちこの友はわがしれる人のもとに嫁らん約束とゝのへりとか、聞しがこの聞し時もうれし涙にくれたりき。およそ友の嫁入すなど聞時はうれしきふしにそひては浮世の風にこれよりもまれ、いかなる人のもとへ行て、いかなる堺界に身をおくらむ、など心まどひてふたかたになるものなれど、この友の行べきはおのれが尤敬愛する人なれば、かゝる懸念ふつ〳〵なくて、とく〳〵其日のこよかしと待わたれるあり。これらの事どもおもひ〳〵途中にわかるゝ事、ともに成がたく、友は我家の前すぎて招魂社の公園迄おのれをおくりてきぬ。ともに緑樹鬱陶としげれる下に夏しらぬ風におもてをうたれて、傘杖にイずみ顔見合せて、ほゝ笑みし時は途のつかれもあつさも名殘なく成ぬ。友は更にゑましげに、けふは誠に今こゝにある如く心地すが〳〵しくうれしさ堪がたしといふ、おのれ其手をとりたれどこたふべき言葉なくて、たゞ涙ぐみし眼に顔を見つめぬ。折しも櫻の青葉ゆら〳〵として五月雨の露の名殘り袖にかゝれるは、無情なる梢ともおもはれず、風に聲ある並木の松は、この友の萬歳をとなふる如く聞えぬ。

雜錄

現今の文學者

文盲生

窮困よく文人を生ずるか、將た文人貧苦を招くか、古往今來東西諸國の文學史何れぞ貧者窮人の生涯記を載する事の多きや、學ぶに資なく讀むに書なく、甚しきは衣食だに意の如くならざりしもの少からず、彼螢光は消えて暗黒文字を見難き時僅かに微蟲を集め、雪光を借りて苦學慘憺たりしもの豈支那の特有物ならんや、嗚呼文人詩客の不遇何ぞ一に此に至るか、吾人は切に彼等に同情を表す、故

人さ今人さを問はず、切に同情を表す。

然れども若文人詩客にして困苦に陷り悲境に惱むは果して文學の全局より見れば幸福か、然らざるか、是吾人が窮むべき問題さす、人の世に在るや、一個人の利害は必らずしも社會の損益さ相伴はず、一人の損害却つて大いに世を利益する事あり、文學者一身の不遇を見て悲しむべからず、吾人が理想の時代こそ萬人榮枯盛衰を共にすべきなれ、不完全なる世界業多き社會に於ては望むべく、行はれ難し。

人は云ふ、衣食の爲め生活の爲めに著作するもの豈大篇を出すを得んやさ、人に從ひ、時によりては夫れ然らん、されど一般に然か云ふ可からず、借財山の如く、拂ふに道なき時急に筆を把り、一氣呵成せし文學尙よく傑作さして人に愛讀せらるゝに非ずや、母死し、屍未た床にあり、葬儀を營まんか、費用の出るなし、屍の側に坐し、一夜喞噎の內に、葬費を得んが爲めに著はせるもの人をして讃稱措く能はざらしむる妙篇なるにあらずや、ジョンソン一度リーセスターシャイヤの學校に在たりしが不適任なるの故を以て職を免せられきバーミングハムに於て自ら學校を設け、亦復敗れたり、時に財實等も餘す所なく、將に糊口の途絶えんさせり、此に於て詮方つきてロンドンに行けり、夫れより廿六年間殆んご筆を揮はざる時なく、以て衣食の資途に充てぬ、此時に於て有名なる著作なかりしさ雖も晚年の大業は實に此境遇ありしが故なり、況や晚年の名篇も尙稿料の爲めに書きしものあるに於てをや、彼等一個の貧文學者、衣食の爲めに著作を爲せし事明かなり、而して「人愁の虛妄」(Vanity of Human Wishes)詩人傳(Lives of the Poets)等の如きものあるに非ずや、ボルンスは一農父の子、幼にして敎育を受くる事少なく、長しては兩親を養ふべき任あり、爲めに閑地に耕耘し、僅かに數種の詩書を友さして暮せし月日も久しかりき、然れども斯くて家計を立つるの容易ならざるが爲め、閑を竊み、時を得て詩を作り他日事業の資に賣らんさせり、其詩世に出でき、昨日の一農夫、今日の大詩人さなり、榮名天下に轟き渡りき、晚年に至り、「農家土曜日の夜」(Cotters' Saturday Night)、(Tam O'shanter)の如き傑作あるも皆貧苦の內、必要に迫らるゝありて呵成せるものなり、尙一の適例を加んか、ゴールドスミス是なり彼幼にして學未だ成らざるの時に當り、父を失ひ、親戚の救助を絶たれ、學資に欠けしのみか、殆んど饑渴に迫りき、是より著作を始め、衣食の用を辨じぬ、中年に種々の職業を爲せしも一も成らず、老年に至りて亦再び著述家さなれり、荒村の名詩、ヴヰカ、オブ、ウエークフヰールドの妙文共に彼が安樂滿足の時に作りしに非ず、饑渴を防ぎ、寒暑を凌ぐが爲めに外ならざりき、尙貧文學者の名作を擧げんか、吾人は殆んど盡る所なきを覺ゆ、只貧者よく傑作を作す能はずさいふの妄を證せん爲め、二三の實例を擧げしのみ。

然れども吾人は貧窮ならずんば文人ならずさ云はず、困苦に迫らずんば名作出でずさ云はず、富有の人、萬事充ち足る者亦よく文人詩客たるを得ん、其例證もさより乏しからず、論旨に要なきを以て此處に擧げず。

大家の出るは如何なる時ぞ、貧なるが故に出るに非ず、富めるが故に出るに非ず、富貴なるも可なり、貧困なるも可なり、只富貴にもあらず、貧困にもあらざるは不可なり、貧苦に陷らんか、極貧に陷るべし、富貴ならんか、世事衣食の事全く心を用ゆるを要せず、望む所叶ひ、欲する者遂げらるゝに至るべし、されど是人爲自力を以て爲すべきに非ず、天性の資質、自然の境遇に從ふべきのみ、凡庸の人ゴ氏を學んで財貨を亂費し、放恣を極め、終に困苦を招くも大詩人さなるは難し、富貴なるに於ても然りさす。

頻りに今日の日本、文豪詩傑に乏しきを嘆ずるものあり、吾人亦之を憂へざるに非ず、然れども時來らざるを如何せん、蓋し今日は新日本の文學少しく發達せるの時、世の文學者を遇する優厚ならず、亦冷淡ならず、少しく筆を揮はんか、衣食に欠くる所あらず、文學者亦幸福なりさいふべし、されど非常の優遇を受くるに非ず、王家の恩澤殊に文人の上にあるにあらず、文人詩客にロードの位階を與ふる書物に記すを讀むのみ、刻苦經營せる著作も數版に數十部を賣るに過ぎず、古今に空絕の傑作あるが如く好評芳聲嘖々たるものも一年の後は亦顧るものなし、我文學者亦不幸なりさいふべし、而して亦不幸にもあらず、幸福ならず、貧困ならず、富貴ならず、此時代は是到底大家の出づべき時ならず、吾人は信ず大改革あらずんば到底文學の大作あらはるゝなしさ。

今日の形勢より推究すれば我文學者の將來果して如何、吾人は思ふ、英國に於けるジョンソンの時代遠からずして我文學界に來らん、即ち文人詩客、貧窮困乏、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

衣食を得るも難きに至るべし、盤根錯節に遇はずんば利器を知る能はず、貧窮困乏の時代來らずんば大家起らざるべし、文人が不幸の生涯に遇ふもさより憐むべし、然れども一生の不幸は後世多年の幸福なり、文學の全局より見れば穴ひに幸福なり、吾人は此時代の來るを今日に預想し、且預言す。

送別

みどり

其一

氣動けば風さなり心地新らし、水波を起せば紋々たる文あらはる、人の心も亦斯の如し。あひて久しければ自づからにして慣れ、友さ居るとの如何に樂く、友さ睦ましきとの何如に切なるかを知らず。一朝その行くを送り、柳梢立せる下に手を握りて前途の康健を祝するさき、胸滿ちて辭ば出でず。あゝわれ君なくんば今后何如にせんさ。天地は唯此事を以て狹きが如く感ず。左れど倘ほ足らず、車白煙を吐き、車輪轟ろき、最后の一瞬時、衷情を露出せるわれらが言の葉を消す、聲自づからに高し。車行けり。全身震ひ、われ如何に友を愛せしかを覺りぬ。弱はり果てゝ、歸路に向へば、家に遺せる友の倘ほ在るとを感ず、此友もし別るれば如何に。われ、行く人の今ま別るゝとを知りて、合ふ人の遂に別れんさするを知らず、世にある幾千日ぞ、情を盡していざ相愛せん。歌をうたひて行く人を送り、歌をうたひて家に向ふ。四面皆友なり、路ゆく人も亦た親しげなり。愛や盡きず、もし愛なくば、如何にして世を送らん、而して愛もし遠永につゞかずは、人世の愛は寧しろ腦苦の種なるのみ。仁愛の天の父は、徒らに人を苦しめず、われらが靈魂をして死せざらしむるとを信ず。

送別

其二

方す子

會ふは樂し、會ふ者離るゝとやあらん。離るゝは苦し、離るゝ者また會ふとやあらん。會ふ時樂しからずんば、離るゝ時如何でか苦しからん。離るゝ時苦しからずんば、會ふ時如何でか樂しからん。會ふ時の樂しければこそ、離るゝ時の苦しきなれ。離るゝ時の苦しければこそ、また會ふ時の樂しきなれ。今や君往かんさす、われ希望もて君を見送る。再び相見るの時、再び相語るの時、如何にかそれ樂しからん。二日の行、四十里の程、さらば道中恙なく。

故山の風色、君を待つて莞爾たり、君よ、微笑もて往き給へや。われ君が着郷の當夜を思ふて、君が家門の好團欒を祝す。君眼の病癒えて歸り給ふ、故山の心中果して如何、われ之を想ふて影ながら祝す。君よ、希望もて立ち給へや、われ希望もて君を見送る、さらば道中恙なく。

嗚呼君往かんさするか、二日の行、四十里の程、希くは無事なれ。「天道、人情、犧牲、獻身、」それ何處に在りても、君それ如何なる境遇に在りても、只之れ信じて安ぜよ。全能至愛の大御手、常にわれらの上に在らなん。君よ安んじて往き給へ、われ安んじて君を送る。アゝ往く所の人、送る所の者、何事ぞ涙胸に迫る。前途……君が前途。顧みて何をか望み得ん、望みて何をか述べ得ん。汽笛一聲、新宿の里。君よ、いざ、さらば道中恙なく。

其三

思ひ亂れて絲の如し

川合信水

新橋より、上野より、新宿より、列車續々、我が愛友を載せて去る、響く氣笛、吐く黒烟、アゝ我れ見聞くに忍んや、徐庶を送りし玄德の情、今ぞ眞に思ひ知らる、不幸の事情物語りつゝ我が前に泣き給ひし人、强く見へても眼瞼に露を湛へし人、我が病を患ひて切に療養を勸めし人、涙を墮さんさて顔を側けて汽車の窓に向ひし人、天眞爛熳、よく他を感ぜしむる人、憐れなる我が妹、アゝ今悉く目前に現はるゝなり、山河杳々、離るゝと四十里、百餘里、逢ふは別れの始めさは、兼て知るとなりさ雖も、道の爲めに結びし淺からぬ友垣、世の常の離別さは、大に其情を異にするなり、友なき寂寥、病の苦、死別の悲、浮き世の壓制、事情の困難、憐れ、花園を亂す風雨の如し、何人も堪へ難からんさす、然り人力決して堪ゆべからず、彼れ果して道によりて堪へ、道によりて立ち、道によりて

一歩も枉げず、憂愁を忍び、困難を排し、荊棘を斬り開くの勇あるか、思へば我れ此處にありて此處にあらず、早や既に彼の人々の心にこそは入りにける、此時や我れ自ら生くるにあらず、我は彼と一になりて生けるなり、乃ち彼の人達の憂ふ如く憂ひ、悲む如く悲み、思ふ如く思ふ、石心脆くも碎け、鉄腸弱くも斷ちぬ、最早堪ふること能はず、泣て祈禱す、願くは我等兄弟姉妹に慰を與へ給へと、白雨一たび下りて一天青々たるが如く、我涙拭ひ去れば大に安きを得、同時に彼の人達の安きを得しや否やを思ふ、アゝ彼等も祈れるか、我と一に祈れるか、我と同じく慰を得しか、得たらばよし、得ずば猶祈れよ、得たるか、得ざるか、聲にて之を聞くこと叶はぬか、形にて之を見ること能はぬか、アゝ我等同志者、今ま降りかゝる困難悲哀の中にあるも、神はよく愛し護り給ふことを信ず、故に望を失はず、愛を減ぜず、却て之を增し、之を大にし、天昏く、風狂ひ、雨暴るゝも、依然として光を失はざる太陽の如くならんことを欲す、アゝ父母よりも、兄弟よりも、親友よりも、基督を愛せしめよ、病の苦、死の悲、浮き世の壓制、不情の困厄、何ぞ我確信を動かさん、磐上に立つの家、千古變らじ、我はたゞ我の天職を行はんのみ、基督既に世に勝てり、我何ぞ勝たざらん。

自ら斯く考へ、斯く信ずるも、愛する離るゝ彼の人々は、果して信を保つか、望を失はざるか、愛を減ぜざるか、思ひ來れば、人情、深く憂ひ惱むなり、古人の詩、思はずも口ずさむ、英雄心緒亂如レ糸と、立て玻璃戸を開て屋上に月を望む、半ば蝕れる空、月光朦朧として亦愛を含むに似たり、

　何事ぞ、弱き、爾は爾の友達の剛きを望みつゝ、何とて自ら弱きや、四十年間アラビヤの沙漠にさまよふも、確信してカナンの樂土を望みしモーセを觀ずや、五十餘歳に至るまで世上を流涙するも、至誠撓まず、遂に漢室を起せし劉玄德を思はずや、

一道の光り心の奥に閃めきて、此清き戒めの辞は響けり、豁然として、嚴然として天を仰げば、浮雲漸く散じて月光晴朗たり、アゝ此自然の景は、我に高かれ、明かなれ、大なれとは教ゆるなり、神の大文章、いつまで見るも飽くことなし、妄りに疑ひ、妄りに評し、燕雀の目を以て、鴻鵠の卵を定めんとする人の心、抑も憐むべし、アゝ神よ、此等の人に、同じく此大文章を味ふの心を與へ給へ、アゝ東京の我、此月を眺め、遼隔の友、同じく此月を眺む、思ひ天に馳すれば、靈既に合す、宇宙をしろしめす神、永久に在り、在らざる處なし、身離るゝも、心神にありて一なり、愛は成就せり、希くは我等同志者をして、人を愛するの愛、基督の如くならしめよ、道を枉げざるの剛き、基督の如くならしめよ、悠々たる蒼天、之を眺むること愈々久しうして、感ずること愈々深し。

増田勇子

備中高梁の人、増田勇子眠りぬ。その病篤きよしは一と月前わが紙上に廣告せしことあり、之を讀みて心を痛め密かに祈禱せしもの澤なるべきに、天は之を招くことを以て、彼女に幸ひなりとし、苦痛類ひなき重き病の床より、いと安らかに彼女を眠らしめ玉へり。押川方義兄、この一婦人が確信を見て、胸を叩き、來世の實在をいよ〳〵深く信ぜり、之に書を寄せて謝して云く、生は孃を見て物言はざる意味深き無言の說教を聞き、何ものを以てするも償ひ難き最と大いなる贈り物を與へられぬと。松村介石兄亦た之が爲めに一場の講話を爲し、其の眞摯至誠なる態度と活辨とを以て、殘りなく彼女が一生を語りぬ。

彼女は未だ嘗て爭そひしことあらず、亦た嘗て己れに私しせしことあらず。幼けなくして情けあつく、友を劬はること母の如くなりき。隣家の友、過ちありて學校に留らるゝ時は、自ら請ふて共に殘り、連れ立て歸る。而して一言も之を口にせず。父母は後に至りて之を知るを例とせりとぞ。やゝ長じて口はしたなき女流の間だに裁縫を教えし時、斷えず教師を非しり

縫物を嫌ひたる女風暫らくにして改まり、德に薫せられて慕ひ集まる者多く、教え子俄かに増せしとぞ。十七、膓滿を患ひ、腹部裁割の大施術を受くること二回、都に上りて更に三回、前后つねに沈靜にして些さかも懼れず、たゞ醫師の爲に其むさくるしきを詫びぬとぞ。生來、優しくして且つ雄々し。其の優しきは本然の性を存して何如にも邪氣なく、人の事を我が事の樣に思ふが故なり。其雄々しきは、義務を感じ、一たん「可爲也」と知れば、何如なることをも爲すの勇あるによる。學校にありては、級中第一なりき。后ち事故ありて學ぶことを得ざりしかど、其天與は年と共に煥發して、聖も尙ほ就いて親しまんことを欲するの美德を得たり。以て大ひに學びたりと云ふべし。彼女は說教せず、亦た論文を綴りしこともなかりき、左れど無言無文の風采德操は、よく幾多求道の人の心に慰さめと理想とを得させぬ。風の如く、鈸の如き、言論の人は、拜伏して教を聽くべし。

吾社の女學叢書第一卷は木村澄子の傳を收めたり。將に其第二卷を出版し、松村介石君、勇子の爲に血涙を濺たらせんとす。遠からずして讀む人の益となるもの出でん。

批評

(106)。婦女詞藻第一篇（中本一冊百九十五頁定價十二錢 東京本石町三丁目 博文堂 發兌）

佐々木信綱氏が編輯にして、婦女子が、文詞、消息、今樣、短歌などを取集めたるものなり。名ある女學校の高等女生が手に成れるはいと〳〵尠なく、多くは、昔し風、又は家庭の教育を受けたる人の作なり。隨つて、文思新たならず、理想、大方た世の常なれど、中に群を拔きて秀ひでたるも亦なきにしもあらず。

(107)。女子消息ふみかきぶり（大本五十葉定價二十錢 東京南傳馬町吉川半七發兌）

「文は其書きぶりうるはしければ何となうゆかしく覺ゆるものなるを、今はやさしき假字書風の衰ろへて女子にふさはしからぬとげ〳〵しき文字のみ流行すなれば、いかでと思ひたちて連綿墨つぎの法を考がへ、御候などのおほき所をたゞし」例の優しく妙なる筆にて消息ぶみのかきぶりを示したるは、小野鵞堂氏なり、關根正直氏之を校す。願はくは卷紙の體に、上下を更に縮めたらましかはと思へど、之れ將た大ひなる失にはあらず。今ま其上卷のみ世に出でぬ。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

〇史海、藤原鎌足

相續二千年、延いて三條實美公に至る、其の範を作りて之が素を養へりしは、藤原鎌足公ありと云ふ。面白き言ひ方なり。而して輕皇子に信ぜられて一朝美人を得るより、法興寺の蹴鞠の會に甘く中大兄に取入り、爾來才を包みて謙讓を裝ほひ、猫を冠りて實權を末代に收採せりと云ふ、着眼奇警ありといへど、服しがたきものあり。他日閑を得ば少さか辨ぜんとを期す。左れど斬新獨得の讀史眼烱々たり、竹内宿彌の傳にまさりて、一層面白く讀まれたり。

〇亞細亞

「日本人」去りて、「亞細亞」來る。一段の改新にあらずや。前には此方より眺め、今は彼方より眺む。ペルリが一來能く國内の開氣を誘導したりとせば、亞細亞大洲論は、能く蠢爾たる小島觀念を警ましむるに足らん。また、日本は亞細亞洲の船首なり、剛として巧みに、舵を操らずんばある可からず。

文學

ミルトンの詩に就て（二）　雲井春香

高潔にして可憐なる貴女は今や木立茂れる林のうちに迷ひいりぬ。兩兄弟は其の軟き姉妹の行方を思ひかねて安き心も無し。中にも弟は種々なる想像を起して怖れ惑ふこと頻りなり。流石に兄は道を信ずる心厚ければ躁ぐ弟を押し鎮めて、左は思ひ屈し給ひそ。主の聖使は之を畏敬するものを守衛して、救ひ給はんこと必定なりといひけるは、

儞が想像する如く妹の身を守るもの無きに非ずかし。彼の女は秘れたる能力を有するなり。儞は今其事を忘れたるのみ。

弟、怪しきことを宣ふものかな。秘れたる能力！　そは天の能力のほかにあるべしとも思はれず。兄上の仰せらるるは其の事か。

兄、そはいふまでもなし。然りながら妹の身のうちにも秘れたる能力の存するなり。もと是れ天の與へ給ふ所、彼が之を己れに得たる上は、妹の所有と云ふも何の不可

かあるべき。噫弟よ是はこれ貞潔のことぞかし。貞潔……之を有するものは精鐵の鎧着たるなり。彼れは箭筒脊負へる女神の如く、人跡絶えたる深山のうち、身を匿すべき便もならぬ大野原、悽愴き林、危難に充てる沙漠の地も、怖るゝことなく、歩むなり。貞潔の光は威儀堂々たり。姦曲たる暴漢も、情を知らぬ山賊も、その清なる乙女の德には併易せん。

詩人はこゝに於て貞潔の德、能人を高尙にし、心志を感化するの効力著るきものあるを謳ひ、色慾淫恣の邪よく人を墮落せしめて、禽獸の地位に下らしむべきを吟じたり。

噫天は貞潔の德を重んずること甚だし。眞實に貞潔なる人ありもせば、上帝深く之を顧みたまふなり。千々の天使之を護衞して、罪惡汚穢のものを追ひ斥くるなり。貞潔なる人は明けき夢若くば儼かなる顯現にて、上帝の教を被むり、俗人の耳には入り難き事どもを學ぶ。貞潔なる人は天の民と間斷なく交はるにより、己が姿も自ら之に化せられて、光り輝やくばかりなり。靈魂の宮(自躰をいふ)を汚さゞるものから、死すべき肉の身、漸やくにして靈の眞實に同化せられて、死ぬまじき者にはなりぬべし。邪慾に耽り、淫情を恣にするものは然らず、其の婀娜めける容姿、其の謹みなき擧動、昔の汚れたる言語、殊に其の猥りなる行ひ、淫れたる作爲は害毒を心の中央に注ぎ入る、之がために靈魂漸くに其靈性をうしなひ、其人は全く一塊の肉と化し去らん。其の生れ得たる天性の光榮飛び去りて跡も無からん。云々

此の氣高き談論に弟の心も引き立てられ、稍勇氣を恢復したる折しもあれ、姉妹も已にコマスてふ摩仙が手中に陷りぬとの事實分明に聞えたり。こゝに於て弟はまたも疑迷の淵に沈淪せんとす。此の期に及びても兄か胸中、正義を信ずるの氣充ち塞がりて凜々たり。何ものか能く其の正直に歩むものゝ行歩安固なる其の信仰を奪ふことを得んや。

無道の恐嚇、魔鬼の術計また何かあらん。世の人の誤りて奇偶と稱する彼能力をも我は怖れざるなり。此らのもの我は怖れざるなり。此らのもの我を嚇さんとするも、預ねて信ずる所は斯くぞある。何條一歩も動かんや。正義は攻擊を被ふることあるも、正義は正しからぬ勢ひに

襲はるゝこともあるも、亡び果することもあらじ。實に仇人の執念く謀りし禍も、翻り來て、義人の幸福なる事疑ひなし、罪の報ひは、己れより出で、再び己に歸り來らん。玉石分明なる時至りあば、惡は惡と邪は邪と、同類ともぐ集りて、君子の群に潜み得ず、己れと共きまた己れと續げる猛火のうちに、盡るとなき苦みに遇ふことあらん。ゆめ之を疑ふなかれ、弟よ。若し此のことば違ひなば、彼の柱せる青蓋は腐敗のみ、荒金の地の基も刈株朽ちたるがごとく、脆くついえん、何時の世までも。

詩人の方寸に溢れたる正氣は字句の上に湧出して、讀者の心胸を吹皷せり。之がために鄙吝の情頓に消し去らんとするを覺ゆ。

橘

松本いさ子

、なき人のむかし植にし立花は咲そめてこそ匂ひみつらん（のにほふゆふへと成にけるかな）

評　こそといひてらんとはさまらず、

水鷄

仝　田中の道子

、日はくれて行かふ人（賤も）のたえしより淺茅か原に水鷄なく也

評　淺茅か原とは野外の心地す水鷄は野外にはあまり聞かずそは水なければなり殊に淺茅か原に往來の人ありともおぼへず

寄書

松岡小鶴女史傳

中川恭次郎

君諱は小鶴、別號なし、縞衣は其假號のみ、其親に事ふるや孝、其夫に於けるや貞、其の人となりや烈、沒するに及んで、私に諡して孝貞烈女と云ふ、父諱は身、字は義輔、人となり恬淡無慾、慈仁にして學を好む、播磨國神東郡辻川村の人、家世農たり、義輔に至りて醫を以て業となす、初田中愿仲に從ひ、晩に吉益南洲に從ふ、最傷寒金匱の二論に精し、傍韻學算法等に通す、年五十を過ぎて男子なし、同國揖東郡網干浦の人中川主水の次子至を養ひて女史に配す、(至諱は愉翅、字は忠卿、後員輔立齋と稱し但馬國生野に住す、)女史幼より多病、深閨に在りて人に適はす、年二十七、始めて嫁す、其人と志尚適はす、黽勉して巾櫛を執る、一男兒を生む、即約齋先生なり、居ること八歳、義輔至を逐ひ、女史の志を奪はんとす、(義輔、至といまだ嘗て口角せず、南望篇の序徴とすべし、蓋義輔性鋭、畸人の目あり、至年少氣鋭、故に合はざるのみ)女史誓ひて日、妾不敏といへども、亦道を聞くに與る、再醮して家聲を汚すに忍びす、箕裘の業に至りては、妾不敏を勵まして之に任ぜんと、義輔之を許し、老を扶け業を執る又二年にして沒す、時に約齋先生甫めて九歳、女史日に字書をとりて句讀を授け、又小詩を賦せしむること毎日一首、約齋先生年十三に及びて、よく白文を誦し、詩も亦見るべし、乃ち族人藤兵衛なる者と謀り、同國加古郡安田村の人梯谷左門に從ひて醫を學ばしむ、後仁壽山校及姫路に轉從す、其地皆南方にあり、女史日に閫に倚りて南望す、遂に自其詩文を粹輯して南望篇と名く、遠近傳觀して嘆美するもの多し、姫路侯之を聞き、代官吉澤邇平をして之を賞せしむ、其文に曰、

辻川組同村　小けん

其方儀貞實にて平生心得方宜家業致出精候趣相聞奇特之事に候依之當坐爲褒美扇子料遣者也

巳八月

小けんは女史の通稱なり、藩の文學角田心臧母子の勤苦を奇とし、約齋先生の爲に學資を給し、勸めて藩黌に入らしめ、生員に列す、弘化丁未の秋、約齋先生甫

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

めて十六、細川公始めて國に就き、生徒の諸經を試む、約齋先生も亦經筵に上り君側に咫尺するを得たり、是に於て聲名一時に喧がし、然れども性狷介にして師友に容れられず、中道にして校を逐はる、乃業を變じ醫に隱るゝこと數年、つひに博識を以て聞ゆ、これ女史の賜と云はざるべからず、女史の新に寡なるや、人或は目して曰、渠婦陽に操行を表して、陰に醜態なきを得んやと、女史之を聞きて憤恚數日、詩を作りて神祠に掲ぐるに至る、女史詩文を善くし、兼て筆札算法に精し、又先考の遺教を奉して、深く浮圖を信ず、法華經を誦すること斷えず、自謂ふ餘經の一偈を受けずと、晩に削髮し持齋して身を終ふ、明治六年十月十五日、隣傍人に死期を告げ、簀を易へて歿す、享年六十七、田尻村圓乘寺の先塋に葬る、遺著、南望篇、をだまき草、詩歌文稿各一卷、京師の僧芷堂其像に題して曰、貞操於夫子、至奉於老親、慈訓教一子、謙讓交四隣、餘暇以就學、節儉以安貧、稟賦雖虛弱、恬淡能養眞、因疾如健忘、秉筆則精神、詩文中己志、其辭樸而淳、君子哉女史、文質兩彬々、嗟乎古之人、嗟乎古之人。

約齋先生八子あり、曰鼎、曰後治歿す、曰通泰、井上氏に養はる、曰芽江夭す、曰友治夭す、曰國男、曰靜雄、曰輝夫、通泰を除きて、皆今下總國布川の里に住せり。

家政

山下石翁

○いたわると云ふ事

一家族の人は、互いに「いたわる」と云ふ心得を大切とす。たとへば弱き植木をあいしらふとの如く、又もろき者を育つるとの如し、愛護せずば枯れ果つべしとこそ思ふべきなれ。扨て、一家に此の美風を起さんとには、先づ主人より雛形を始め、下々に至る迄て自づと見習ふやうになすべし。良人やさしく其妻を遇し、いと信切に之を保護するときに、兄弟は亦之れに化せられて、其姉妹を大切にし、權助もお三の爲に水を汲むことを喜びとせん。斯して勳爵士の風一家内に滿つ。又たしうとめ、其よめを信切にし、よめ、其姑をいたわる時は、娘は之を見習ひて下婢に無理を言わず、下婢も勞を忘れて孃君の爲に力を盡さんとす、斯て一家、上下、互ひに相助けていたわる時は、親睦の風は止みなくそよ吹き、人皆な春の顏ばせあらん。樂しきと如何斗りぞ。

○下婢

下女召使ひ方を如何にすべきやとは、目下亞米利加合衆國に於て喧すしき論題なり、名ある大家双方に分れ、或は下婢に代りて辨じ、或は主婦の爲に所望を述べ、共に都合よき所ろにまとめんとす。

西洋人は奴隷を用ひたる習慣のこり、兎角下女を使ふに我儘の所行あり、德高き人にも往々其くせあるは、聖人が牙をむき昔し猿猴時代に用ひたるヲドシを我知らず現はすの類か、見事ならぬことなり。

我國は封建の習慣何ほ去らず、主婦と下婢との間だに、君臣

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

の理想をのこし、今に至るも田舍には感ずべき忠婢仁夫人尙ほ多くあるあり。願はくは今后長久に此美風を失なはず、他日の我國に今の西洋の如き下婢問題の起り來らざることを。

されど、世開化し、一家の用務繁くあれば、家内の規則も嚴重ならずんばある可らず。起臥、食事、來客、外出、安息などそれ〴〵に、時を定むることを要す。斯せざれば、下婢は常に働らきつゞけ、夫人は斷えず氣を配り、双方ちとの安態もなけん、かゝることは續くものにあらず。

然るに尙ほ其まゝにて、追々に開け行く世に昔しながらの亂雜を極めんには、下婢の難儀一と方ならず、勢ほひ不平を起して權利義務の爭論となり、今の西洋に於ける如き囂々たる議論の種とならん。

婚姻論の掲載大ひに延引せり次號より可成載せ可申也。……………

時事

○教育家は位階を要せず

若し判任ならば、奏任の人を如何に教育せん、若し奏任あらば勅任の人を如何に教育せん、若し勅任ならば王家の人を何如に教育せん。教育家は位階を要せず。政府の待遇を得て喜こびとする如きは、抑そも教育界衰退の顯兆なる哉。

○伊藤伯、大隈伯

何すれぞ堂々相分れて、朝野に大拮抗をせざる。自由改進の兩黨合して民間の大政黨となり、薩長合して朝に立こもり、玆に初めて眞政黨及び政黨内閣の價を作ることを得ん。黒幕宰相ビク〴〵として顔を出さず、黒幕主領遠慮して采配を握らず、高い山から見物して瓜や茄子を歌ふ。斯流の人、何を以て政治家と云ふことを得ん。

○信書秘密

「國會」去二十八日の紙上に、驚ろくべき怪報あり。信書秘密の保安斯の如く危ふきか。吾等は大いに此問題を研究せずんばある可らず。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

○政風針

黒田伯は起んとし、井上伯は上京し、伊藤伯は家居せず、大隈伯は大ひに周旋す。政界暗に大風雨を捲き來らんとす。

○安息

安息せざりける國民新聞は七月后改めて曰く、今后安息して新鮮の氣を養わんと。改良なるべし。

○時事新報

兎に角タイムスめきたるは時事新報なり。今后更に紙面を擴張すと云ふ。日進の運を祝す。もし文學上の趣味を今一きは加味せば、申分あるまじきに。

○北海道

汝は新長官を得たり。更に亦た板垣君を觀迎せんとす。新地に芋は適すべしと云へど、今は更に好作物なきにあらず。特に殖民地は自治に適す、何を以て獨り代議政に漏るゝの理あらん。今の機一奮して、當に此般の改革を奏すべし。

○農科大學

合併后の模樣にては、分立をよしとす。左れど本來之を一大學にすべきほどのものにあらず。

女報

可愛子編

●謁見　白耳義國特命全權公使ジョールシュ、ナイト氏は、賜暇を以て近日歸國に付、御暇乞のため去月廿四日午前十時參内、　皇帝陛下へ內謁見仰付られ、又た該公使及び夫人は同時　皇后陛下へも內謁見仰付られたり。

●行啓　皇后陛下は先日來御容体兎角勝れさせ玉はざる爲め、轉地御療養の爲め去月廿四日午後二時御出門濱離宮へ行啓遊ばされたり。

●御機嫌伺　皇后陛下の御機嫌伺として、花房宮中顧問官は、去月二十八日夕參候せりと云ふ。

●皇后陛下と弘道館の碑文　水戸烈公の書かれし弘道館の碑文は、其摺りたる物を、皇后陛下の御居間の床に懸させらるゝとなりたりと。

●山縣伯爵夫人　は去月廿七日午後二時二十分新橋發滊車にて、大磯の別莊へ赴きたりと。

●大日本婦人教育會附屬女學校　昨今我が姉妹にて海外に醜聞を流す者あるは、我が姉妹に教育なく職業なき者あると其の一因なるを慨き、茲に大日本婦人教育會にては其の附屬女學校を設立し、中等以下の婦人女子に簡易の學業と必要の女紅とを教授せんとて、同會長毛利公爵夫人、同副會長毛利子爵夫人の外、同會員小鹿島筆子、加藤錦子、棚橋謹子、添田秀子、村越茂子、野村すぎ子、合原琴子、三田小松子、白川加壽子の諸氏創立委員となり、資金募集に着手したるに、少きも數圓多きは數十圓を義捐する人ありて、其の金額既に數百圓に上りたれば、尙ほ秋冷の候を期して音樂會其の他相當の企を爲し、廣く仁人君子の贊助を請ひて徐に授業を始むると云ふ、但し寄附金は一時に二十圓以上、又は每月一圓以上を收むるものとなし、本鄉區駒込千駄木町五十八番地棚橋絢子氏方にて事務を取扱はるゝ由。

●婦人教育會　去月廿七日山下町鹿鳴館に於て、大日本婦人教育會常集會を催し、稻垣滿次郎、和田垣謙造、土子金四郎諸氏の演說ありたり。

●音樂納會　各大臣の夫人令孃を始め、其他貴夫人の設置に係る音樂會は、去月三十日午後七時より、鹿鳴館に於て右の納會を催す筈にて、當夜は內外の貴顯紳士にも多く參場するといふ。

●露太子殿下の惠賜金　露國皇太子殿下は、日本赤十字社の主義を深く嘉尙せられ、金三千圓（內五百圓は救助費）を同院へ惠賜せられたり。

●佛教慈善會　此程湯島麟祥院に於て各宗の大協議會を開き種種協議の上、いよ〳〵佛教慈善會を創立する事に決し、當分各宗より創立費として六百圓を醵出し、漸次會員を募集し擴張する筈にて夫々委員等らを選擧したり。

●釋雲照律師　大和國長谷寺の雲照律師は此程上京、音羽護國寺に錫を駐め居れるが、此度其筋の委囑に依り每日一回華族女學校に於て法話をなす由。

●婦人勸業會　は今度淺草に起りたり、會員卅名以上に至る各府縣には支部を設

●石島其三郎氏　上毛青年の同氏は、嫌疑にて入獄中なりしが、此程無罪出獄せり。

くるさいふ、又漸次會員の贊成を得て、雜誌を發刊し、追々學校、婦人工業場、及び婦人商店を設置せんさする目的なりさ云ふ。

●南しづ子氏の寄附金(再び)　前號に同氏より婦人矯風會へ金五圓寄附せしさ書きしは七圓の誤、又同氏は此程金八圓を寄附せられたりさいふ。

●在外日本賤業婦人の取締に就て　曩に添田文學士は婦人教育會に於て演說を爲し、同會より其筋に向つて之れが禁遏法の勅令を發せられんとを出願ありたしさの意を述べて、其出願を促したるにより、同會々頭毛利公爵夫人を始め、各貴婦人社會にも同意を表し、其手續の下相談中なるが、添田文學士は尙ほ一篇の意見書を草して當路の某貴顯に賤業婦人海外行禁遏法を設けらるゝの必要を具申したりさ云ふ。

●女學に關する雜誌の歷史　は六月二十九日の讀賣新聞附錄に見へたり。

●醜業婦人取締は先づ横濱より着手せらるべし　さ東京日々新聞の横濱通信者は云へり。

●芝白金の聖書女學校　は去月二十六日卒業式を執行せり。

●海岸女學校　築地なる同校は去月二十六日閉校式。

●女子學院　にては六月二十八日午後六時フルベッキ氏の演說、同三十日午前十時文學會、七月一日午前十時卒業式ありたり、卒業生は高野あい子、提簍きん子、三谷たみ子、奥野まづ子四氏なり。

●横濱共立女學校　にては去月三十日和漢學科卒業式執行せられたり、卒業生四名、曰く飯野蟆子、森喜代子、鈴木百子、吉武吉野子。

●京都の同志社女學校　は去月二十六日、第十四學年卒業證書式を擧行せり、全科卒業生、伊藤君子、河村虎子、堤延子、舊規則本科卒業生は、福田千代子、杉山照子、本學年に於て豫備科を卒業せしものは、井上久枝、板原久枝、伊藤孝子、濱田茂子、四堀みか子、新田のぶ子、大村逵子、香川富野、高木久子、苗村せき子、中島たつ子、野手順、窪田安榮、山口よし子、佐藤ゆき子、佐藤ふさ子、齋藤澤野、安部田佳榮、宮本すな子、清水せい子以上廿名。

●同志社看病婦學校　は去月二十四日、第四回卒業式を擧行せり、今回の卒業生は大抵京都府立療病院、其他の私立病院へ看病婦さして雇聘の約定整ひ居る由、卽ち其卒業せし人々は家村こう子、濱田しげ子、高橋千代子、久保田きよし、西山らく子、黛きち子、富田さく子、谷口はな子、大塚もさの、梶谷はな子、十氏。

●大阪梅花女學校　は去月二十七日卒業式擧行、大塚きな子、鎌原政子、立石ひさ子、三氏英語全科を卒業し、兼松こさ子、川嶋よし子、黑田ゑい子、松本ふく子、定包ゑい子、杉谷くら子、六氏は本邦全科を卒業せり。

●外國夫人の厚志　廣島縣安藝郡瀨戸村八百九番地平民山口玉藏(廿五)は兩三年以前上京し、芝區伊皿子町齒科學校へ入學し居りしが、不幸にも先頃眼病に係り遂に兩眼を失ひたれば、無據馴れざる按摩を業さなし居たりしが、先頃横濱へ出稼なさんものさ同地へ趣きたるも、横濱も不景氣東京よりイヤ增し、到底生計の見込なきに殆んど困難し、東京に歸らんものと思ふも滊車賃さへなきを、同地山手七十二番館居留英國人メセスヂーエーアレン夫人は、深く之を憫み、幸ひに日光へ趣くを以てセメテハ新橋迄送り届けんものさ、共に出京して先きに住居したる芝區伊皿子町齒科學校へ十錢の人力車賃を拂ひ送届られたりさ云ふ。

●横濱婦人會　は去月十六日開き、植山直樹氏の說教ありたり。

●千葉幼稚園開園式　は追々延引せしが、去月廿一日信之館に於て擧行せられたり、師範學校女子部生徒の唱歌もありて、頗る盛なりしさいふ。

●茨城縣猿島郡森戸村邊は　女子教育振はずして、尋常小學校の女生は僅に二十八名なりさいふ。

●江州長濱教會の婦人會　は去月十二日開き、タルカット氏の勸話ありたり。

●畠山勇子の紀念碑　勇子の爲に其墓所へ紀念碑を建設せんさて既に多くの贊成人を得、京都大宮松原西入淨土宗末慶寺(勇子の墓地)の住職和田準然師が目下專ら盡力中にて、既に東京なる勇子の伯父榎本六兵衞氏方へも照會し來り、勇子の履歷性行及び其の宗旨、菩提寺、紋所等を詳しく通知し且つ其寫眞をも送られんとを求めたり、又其照會狀に勇子の法名を記しある、卽ち號して「義勇院頓室妙教信女」さいふ。

●畠山勇子追悼書畵會　本月九日は彼の勇子の四十九日に相當するを以て、勇子の墓所なる松原大宮西入末慶寺に於て追悼書畵會を催ふす趣きにて、同寺住職より市內の書家畵家へ向け、夫れ〴〵案內狀を發したる由。

●京都看病婦學校のタルカット女史　は過日江州長濱に赴き、十四日彦根に立寄り、安息日を開かれ、有益なる感話ありたり。

●藤井紡績所　京都二條の河東に在る藤井紡績所は、現在職士の數男女合して百十餘名ありさいふ。

●女子の書籍閱覽　京都教育會の圖書館月表によれば、女子にて閱覽せしもの、五月に十一名ありしさ、喜ぶべし、これまでは一人もなかりしさいふものを。

●京都高等女學校の暑中休暇　は從來五十七日間なりしを、今般短縮して、七月二十日より八月三十一日まで四十二日間させられたり。

●京都美術學校の別科生　小學教員にて望みの者は、別課生さして午後三時後に教授を始むさ云ふ。

●丹後宮津の婦人會　は五月三十日、基督教假會堂にて開けり、兼て來津のパロ女教師、及び二三女史の談話あり、聽衆凡そ二百四五十名。

●共同製糸所　丹後竹野郡木津村にては、今度私立共同製糸所さ云へるを設置し工女四十人を雇入れ、開業したる由なり。

●山陰基督教徒女子靑年勵精會　因州鳥取の同會は五月廿五日大會を開き、松江在留のバスエ女教師を招きて、マダガスカル島傳道の來歷を開き、幷に數年來鳥取英和女學校に働かれし山脇はな子氏が去て米洲に遊ばんさする際なるを以て、同氏の演說を乞ひたりし由。

●鳥取婦人會　は去月二十五日、婦人通俗教育講話會を開きたり。

●板硝子寄附　因幡國鳥取市元魚町二丁目綱谷金次氏は、頃日因幡高等小學校に臨み校舍を參觀せしに、女子部教場の硝子窓過半紙帖にせしを見て、板硝子數十

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

枚を寄附したりと、奇特といふべし。

●順正女學校　備中高梁なる順正女學校は、校運追々隆盛に赴くと云ふ、因に曰ふ、同學校は彼の増田ゆう女が學ばれし處なりと。

●讃州丸龜に於ては　五月中旬、神戸女子傳道學校長ダツトレー氏赴き働かれたり、又同校生徒鹿子木儲子氏歸龜して、熱心傳道に盡されしより、近頃新たに聖書研究會を開き、婦人間の傳道は、日に月に益々好都合に赴くといふ。

●鹿兒嶋女學校　は美以美教會員竹崎一二氏の創立に係り、其目的善良なる母を造るにあり、之が教授の任に當るものは末岡婦人二名、本邦男女二名にして、在學生徒十四名あり。

●松操女學校　宮城縣仙臺なる同校は、去る二十九、三十、兩日、高等科生八名、尋常科生十八名の裁縫科試驗を施行せり。

●女子同窓會の養蠶　仙臺市内東二番町高等小學校女子同窓會々員等の養蠶は、全く上簇して好結果を得たりとて、去月二十九日同校内に陳列して、衆人の縱覽に供せりとぞ。

●仙臺市に於ける結婚と離婚　去る四月中、同市に於ての結婚は五十七、離婚は二十三なりと、アヽ何ぞ離婚の容易なるや、數多なるや。

●楠公夫人の墳墓　大坂府下東成郡玉造町大字西玉造千二百八十番屋敷土岐篤太郎氏は、楠公夫人の末孫の由にて、四十餘代連綿として續き、系圖は勿論其の遺物等も保存しある由なるが、本年二月頃の事とか府下河内國河内郡牧岡南村大字横小路十一番屋敷蘇井と稱する所より、楠公夫人の墳墓を發見したりとの事を聞き、直ちに同所に赴き穿鑿を遂げ且つ古老の傳ふる所を聞くに、同所には四十餘年前までは多門寺と稱する古刹あり、内寺には楠大樹一株あり、之を稱して多門の楠といふ、其後何故にや伐拂ひたれども、其根は今尚ほ存在せり、近傍の田地を多門田と稱するは寺院の名稱に因みしなり、彼の楠公の夫人の墳墓は此の寺中に在りしとは聞けど、歳移り物變りて土地の口碑に傳はるのみ、今回發掘したる古墳は必ず其の墳墓なる可しとの事に、土岐氏は大に喜び歸阪の上證據物件を取揃へ、府廳に出頭して前知事西村氏に面謁し右の次第を述べ、新殿を建立し度由を述べしに、知事も之を賛成し、尚知事の夫人も新殿建立の際は應分の力を爲すべしと誓はれたれば、土岐氏は盲龜の浮木を得たるが如くに喜び取敢へず、楠榮講社なるものを設け、七月一日には兎も角も自宅に於て遷靈式を執行し、新殿建立の事は素より多額の費用を要する事なれば、都合に依りては兵庫の楠公神社か、四條畷神社の内へ合祭する由なり。

●スマトラ嶋に於ては　男子は死後其財産を己の子に與ふるを禁じ、之を其父又は母を與ふるの習慣あり、然るに婦人死する時は、其財産を悉く己の子に讓り渡すを常とす、爲めに全嶋の富をして漸次婦人の手に歸せしむるの結果を來せりと。

●松の友　澱粉質を主成分とせる良質の髮あらひ粉なり時節柄お試みありては如何製造元は新石町の駿河屋なり。（いづみ）

●キャレー水　香氣清素として皮膚を刺衝するが如き欠點なき香水なり朝夕之を用ひられなば老廢せる表皮を脫し皮膚を清潔にして光澤を出す一助とならむ（同）。

●藥齒磨水品散　は質良好にして芳香あり、用て口中の清爽を覺ゆ、廣告欄を見よ

●日本全國卒業女學生人名人數一覽（學校創立より本年四月に至る、）（第六）

●東京の部（六）

●女子高等師範學校（前號の續き）沼津つい子　高崎よそ子　清水たつ子　山中かう子　岡みやこ　相川かつ子　野村つぎ子　野村すぎ子　遠藤いさ子　大江なか子　吉村けい子　畑上つな子　土屋うた子　三宅やま子　渡部かう子　上田たか子　吉村しかえ　嶋田かう子　宗てい子　高田かう子　柘植くり子　前田まさ子　齋藤さめ子　藤沼のぶ子　牧野ゐい子　齋藤ちよ子　京極しげ子　高島かう子　須田きよ子　尾藤はつ子　安藤みつ子　一瀬ふさ子　三輪よし子　小林さし子　淺田さみ子　牧野きよ子　小山こまえ　杉山よし子　三輪よし子　抑本よし子　芦原ぬひえ　鈴木けい子（以上小學師範學科卒業、東京女子師範學校と云ひし時）（合二百二十一名）。

多羅間しん子　遠山くに子　伊東いね子　日下なか子　濟岡みつき　頓野きよ子　松田さき子　波佐谷みち子　時岡くめ子　岡崎おりの　多田さく子　近勝いち子　三井よれ子　山内ふき子　吉田さみ子　大野きく子　細なほ子　淺岡きく子　根本しか子　仙頭いさ子　名艸ふき子　關すゑ子　近藤みち子　前野きよ子　西川かめ子　野本ざら子　稲嶋ちか子　諸井くま子　木村すゞ子　小澤しか子　森永きよ子　鈴木しほ子　矢澤さみ子　菊地ふぢ子　中嶋つれ子　波多野たまき　米山さく子　鵜見りう子　城みは子（以上小學師範學科卒業、高等師範學校と云ひし時）（合三十九名）。

安井てい子　大橋さみ子　野口ゆか子　西山みち子　西里みち子　片岡つね子　小川はま子　牧さは子　宮野きん子　土岐やす子　野村おさめ　河野きし子　竹澤せん子　佐々木あさ子　太田みつ子　田中くに子　原いく子　細野銈子　星名きよ子　小貫擧子　吉田のぶ子　吉川鄕子　窪田すみ子　志賀かま子　池田しの子　戸澤かず子　三好いれ子　藤林まさ子　安藤みち子　高澤鋹子（以上高等師範學科卒業、女子高等師範學校と改まりし以來）（合三十名）。

廣瀬寧治（小學師範學科卒業）（一名）。

（總計二百九十一名）。

週報

●官令　五月二十三日勅令を以て外國本邦郵便電信局長以下局員月手當金の件を裁可公布せらる●二十六日同令を以て明治十七、十八、十九、三年度の中山道鐵道公債金歳入歳出の決算を裁可公布せらる●同日同令を以て明治十九年度整理公債金歳入歳出の決算を裁可公布せらる●同日同令を以て吳鎭守府定員表中改正の件を裁可公布せらる●二十九日市町村立小學校長及教員名稱及待遇の件を裁可公布せらる。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

品名	二十七日
白米(一円ニ付) 一等米	九升八合
二等米	一〇〇
三等米	一〇四
四等米	一〇九
五等米	一一四
正米(一円ニ付) 越中米	一斗四升七合
越後米	一四五
美濃米	一四三
尾張米	一四〇
一志米	一三七
雜穀(一円ニ付) 本貫大麥	三斗二升五合
上州小麥	一六五
竹林小麥	一七五
梅澤大豆	二一〇
青柳大豆	一九二
吟小豆	一四八
白胡麻	一三五
黒胡麻	一五〇
鹽(一円ニ付) 赤穗	三、五五
大撫	三、六五
本齋	五、九〇
新齋	六、五〇
醬油(一円ニ付) 最上 / 極上 / 上物 / 中物 / 並物	七分九厘 八五 八九 一、一五 一、三三 一、六五 一、八五 二、一〇 二、二〇 二、五〇
味噌(一円ニ付) 製上白	七、〇〇〇
地赤	七、〇〇〇
同上白	五、〇〇〇

品名	二十七日
素麵(一箱ニ付) 長素麵	七〇錢
切素麵	八〇
折素麵	三三
片栗	三五
綿(一円ニ付) 新坂上銘	七九〇目
新京丹大入	八一〇
新坂丹大入	八二〇
新三上銘大入	八三〇
新尾上銘大入	八三五
地綿文庫入	八八五
眞綿(一個ニ付) 上々入金	一三〇、〇〇円
上入金	一二五、〇〇
並入金	一二〇、〇〇
白木綿(一円ニ付) 玉鶴	三、四五
綾鶴	三、七五
日ノ出鶴	四、〇五
若柳	三、二〇
稲岡	三、四〇
蓬萊	三、八五
古新	三、二二
改メ	三、五八
間銘	三、八〇
蚊帳(一張ニ付) 五六五尺	四、〇八円
六七五尺三寸	五、一八
八五尺五寸	六、二五
六九五尺八寸	七、〇一
七八五尺八寸	七、二二
七九五尺八寸	七、七六
七十六尺	八、六二
八十六尺	九、四〇
十々六尺	一〇、六〇

品名	二十七日
製茶(一貫目ニ付) 山城江州稀大頭	二、七五円
同稀頭	二、四〇
同大頭	二、一〇
同中頭	一、七〇
同中茶	一、三〇
狹山稀大頭	一、九八
同稀頭	一、六〇
同大頭	一、三〇
同中頭	一、二〇
同中茶	九〇
乾海苔(一百枚ニ付) 洲崎 / 大森 / 深川村 / 大師田 / 上總	七〇錢 一、〇〇 四〇 一、〇〇 三五 一、〇〇 三五 八〇 二五 七〇
鰹節(十貫目ニ付) 薩摩上	一六、〇〇円
伊豆上	一九、〇〇
城の腰上	一七、五〇
遠州節	一七、〇〇
銚子大	一〇、五〇
土佐	一〇、〇〇
水油(一樽ニ付) 地水	六、七五円
胡麻	九、五〇
荏油	一〇、二〇
桐油	六、七〇
綿油	……
坂水	七、八七
石油(一箱ニ付) チヤス・ター	一、六三円
デボース	一、六三
ホーキ	一、六六
ロシヤ	一、六〇

穎才新誌

● 雜誌大王 **穎才新誌** 見本進呈 投書隨意 毎號附錄發、毎土曜發、

掲載種目 **論文** 文學科學 **雜文** 記事論說 **理化、詩、和歌、發句** 漢文國文及方ゐ詳解 後傑逸事ヲ載ス ● 毎月懸賞ノ詩歌俳ヲ載ス ● ● 一部前金十八錢 府外郵稅五厘

● 受驗必用 **植物問答五百題** 郵稅共金二十四錢
● 受驗必用 **動物問答五百題** 郵稅共金二十四錢
● 受驗必用 **歷史問答六百題** 郵稅共金二十四錢
● 受驗必用 **地理問答一千題** 郵稅共金二十四錢
● 受驗必用 **化學問答一百題** 郵稅共金二十四錢
● 受驗必用 **物理問答四百題** 郵稅共金二十四錢
● 必用 **漢學問答一千題** 郵稅共金二十四錢

東京神田美土代町三丁目 穎才新誌社

むし類木の葉石るゐ

採集法

右い星野愼之輔君が農科大學ゐ於て實地研究より得たる簡便の採り方なり歸省の人、漫遊の人、庭園ゐ遊ぶの人此一冊を携えて夏期の暇ゐ實地觀察の學問を怠る勿れ

賣價十錢 郵便切手一割增し 郵送賃二錢

女學雜誌社

畠山勇子

西京に自殺したる一女子が性格を評論し、其玆に至りたる因緣を推窮して、細かに其皮肉を窺ひたる社說は女學雜誌第二百六十八號にあり之に續き其次號に於て、

自殺論

を掲げ、自殺に三種あるとを說きて之を痛論したり。

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

中學校師範學校教科用書出版廣告

中村五六先生編纂

中等地理

本書ハ尋常中學校同師範學校等ノ中等教科書ニ充テンガ爲メ出版シタルモノニシテ其編纂ノ順序方法宜シキヲ得隨而文字文章ニ一點ノ難ズベキナキハ勿論製圖ノ精確緻密ナルト其印刷ノ鮮明美麗ナルト繪畫ノ趣向紙質ノ光澤製本ノ注意等總テ外國製地理ニ讓ラザルハ弊社ノ自ラ誇ル所又世評ノ許ス所ナリ已ニ日本ノ部二卷完成シタルニ依リ幸ニ清覽ヲ賜ヒ續々御採用ノ榮ヲ垂レラレンヿヲ

全四冊日本誌二冊完成 萬國誌二冊製本中

卷壹 定價金五拾五錢

卷二 定價金六拾錢

郵稅各金八錢

文學士高津鍬三郎先生・文學士和田萬吉先生 同纂

中等教科國文學

國文國語ノ書類世間尠カラズト雖モ中學教科書トシテ採擇スベキ完全ナル書類ニ至リテハ甚ダ稀ナリトス本書ハ其欠ヲ補ヒ尋常中學同師範學校ノ教科書ニ充ル目的ヲ以テ高津和田兩文學士ノ編纂セラレタル最良ノ教科書タリサレバ兩書トモ發刊以來頗ル好評ヲ博シ已ニ十數ケ縣ノ尋常中學校同師範學校其他各種學校等ノ教科書ニ御採用ノ榮ヲ荷フニ至レリ尚續々御採用アランヿヲ乞フ

全部四冊完成

卷一 卷二 定價各金四拾錢

卷三 卷四 同各金四拾五錢

郵稅各金八錢

出版發賣 東京日本橋區本町四丁目 文學社

關西賣捌代理店 大坂東區備後町四丁目 吉岡平助・大賣捌各府縣下書林

女學雜誌大安賣

第百號より、第二百號に至る迄、欠號なく調ひ居るもの多少有之候まゝ百卷をば備に一圓五十錢にて前例の如く賣拂ひ可申候、其后欠號を生ずる分八十冊にて金一圓の割にて相そろへ賣捌可申候但何れも一と通りづゝ買入を要す。

第三版

百人一首講義

上製美本 五十錢 郵稅六錢

並製淡裝 三十五錢 同 四錢

緣夏の前讀に宜し 歌留多遊びに宜し

逆移に宜し 詠歌に宜し

女學雜誌社

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

〇色を白くするさぼんの元祖たる三能さぼんは

藥劑士大鐘立岱氏と製造人西條重兵衛氏と多年の實驗により主として男女全體の色を白くしにきびそばかす皮膚病及び諸傳染病の消毒に大効ある藥劑を配伍し調製したる物なり昨明治二十三年十月を以て弊店の發賣する所となり爾來日尙淺きも其効能の著しき事實に三能の名に背かざると愛顧諸彦の高庇により世に高評を蒙り弊店の幸福之れに過ぎず然るに三能さぼんの日に月に益々盛大なるを慕ひ數多の破廉恥商等種々まぎらはしき色を白くする〇〇さぼん或は何さぼん又は何と一兩毎に現出し何れも外見よく何分かの香氣を含み一寸素人好きのするさぼんなり然るに實際功顯ある三能さぼんは返て容形あしく御使用中何となくざらつく氣みあれども是れ即ち藥力の致す處にして功能を主としたる證據なり三能さぼんは決して香氣や形容を主としたる〇〇さぼんの類にあらず又尋常化粧石鹼と異なるものあり今回從前の商標即ち玆に掲げたる洋裝婦人の圖を以て公然商標とし農商務省登錄御許可相成候に付御愛顧の諸君篤と右商標御覽の上他の形容さぼんに惑はされず愈御愛顧あらん事を江湖諸君に希ふ●定價一個十錢郵税二錢郵劵代用不苦候但二錢切手に限る右品各府縣下賣藥店又は和洋小間物店に取次販賣所御座候間御最寄にて御講求奉希候也

銀座一丁目

發賣本舖　つやぶきん本店　佐々木玄兵衛

家庭廉價 女學書類發行　女學雜誌社編輯

子供の談
紙數八十葉　郵税なし　定價十二錢

右は子供の爲にある好きお話にて、母親が言ひ聞かすに結構なる材料なり。第一、田舍音樂師。第二、菫の君、第三、熊と旅人。第四、風と日の喧嘩。第五、ハイ〳〵とタヾイマ。第六、カンとクッド。第七、王にも勝てる人々。第八、母の愛。第九、柔順なる娘。第十、英雄の所業。第十一、まましき兄妹。第十二、正直な樵夫。第十三、慾婆。第十四、忠義の家來二人。第十五、不思議の新衣裳。第十六、小娘とガマ。第十七、尤も惡き所行。第十八、正直なる小娘。

西洋女禮
紙數六十七葉　郵税なし　定價十二錢

右は、婦人紹介の事。婦人書面紹介の事。婦人訪問名刺の事。婦人會話の事。婦人案内の事。散歩、かざり、宴會の事。食卓上の心得の事。婚姻の事。客を過する事などに分ち、西洋貴婦人の心得を一と通り平易に解明したり。

女子生理
紙數百九十葉　郵税なし　定價廿五錢

右は、月經の事。懷姙の事。分娩の事。の三つに分ちて、くはしく女の生理の事を說き。且つ長谷川泰氏が婦人病の元因、村岡範爲馳氏が眼鏡の話と云へる二つの論を附錄としたるもの也。

和畫案内
紙數百廿葉　郵税なし　定價五錢

右は八木雜辰氏の講述にかゝるものなり

兒育て草
紙數百六十葉　郵税なし　定價二十錢

右は育兒の心得を問答躰にして、人の氣のつかぬ細かなる事迄て一々說明し、母として子を育つる總ての心得を悉とく講述したり。

邦文學
紙數百六十葉　郵税なし　定價二十錢

右は同志社教師松山高吉君が講述にして、和文躰の文法、語格を、極めて細密に說明したるもの也。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

●一周間分拾錢
●三周間三拾錢
●五周間五拾錢
●十一周間壹圓
五周迄郵税弐錢

本劑は子宮病藥中の王と稱られ飲にあらず玉藥にして病原の要所へ直接挿入なす藥故に奏効全治の速ある事は江湖諸君の熟知せらるゝ所故玆に効能を記せず●抑婦人にして輕重子宮病のなき方はなしと雖他の閧へを忌恥て常の血の道なりとて等閑に附し病を益强盛ならしむ偶々藥用するも内腹藥を用るのみ實に迂遠の極と云ふべし爲に種々の病を發し生涯苦腦する者多し此玉藥は直に病源の要所へさし入る治療藥にして其功驗全治の速なるに至りては内腹藥の遠く及ぶ所に非ず子宮病を患る御方此點に御心附早く御試用ありて生涯病苦の根を絶ち壯健に復し人種繁殖の基を開き給へ委敷は本能書に記す

子宮わた

紙包三枚入金五錢
紙函九枚入金十五錢
同十五枚入金廿五錢
三包迄は郵税弐錢

此姫綿は月經不順コシケ强陰門たゞれ又かゆく痛白血永血しやうかち寸白產前產後尿水近く月經前後腹を痛氣分惡敷つき蟲冷症腰腹筋張引つり痛何となく氣分引立ず月經日限なく長き方御用あれば極て三日にて揚る又何程强共粗走等有事なく氣分を健に爲す故瀛車瀛船等旅行の際別て欠くべからず總而子宮諸病を未發に豫防する良藥綿なり●右二方共全國各地有名藥家に取次御座候間最寄にて御購求可被下候●方今類似の紛敷品賣捌者有之候間本舖の登錄商標及町所姓名篤と御記し可被下候

東京淺草公園新畑町一番地
本舖 清水總之輔

同 日本橋上槇町
發賣元 安川榮次郎

同 瀬戸物町
同 玉置金八

特約

●瀧之端 守田治兵衞
●銀坐二 岸田吟香
●同一 佐々木玄兵衞
●同三 松澤八右衞門

●村松町 岩淵長藏
●馬喰町 平尾贊平
●米澤町 大木口哲
●本石町 森谷萬治郎

英語女生徒募集

各科共夏期試驗終教科書ノ改撰且暑中休暇爾七月一日以降女學ノ別科ヲ設ケ午後五時至六時特ニ教授月謝ハ五拾錢但教師日本語ニ通ル純粹ノ英國婦人ナリ

築地三十三番　歐文正鵠學館

天上には榮光神にあれ

發行所（京橋區竹川町九番地メソヂスト出版舍）

護教

毎週土曜日刊行　一部金貳錢五厘

我護教は我國に現在するメソヂスト諸派の感情希望を代表し我道德界精神界に屹立して一旗幟を建てんとする者なり　蓋し第十八世紀怪疑横行の時代に於て我メソヂスト教會は經驗的信仰の中に生れ靈界の頽運を挽回せんと試みたり　故に若し我護教に一家の躰面ありとせば實に此信仰恢復の天職を負へりと自信する最大にして最新なる正統教會の誕見たるにあらざるべからず　然れども我護教を以て單に一教派の機關なりとして顧みざると勿れ何となれば我國の精神界道德界は我護教の觀察批評すべき分野にして我護教固より力微勢孤なりと雖も期する所は明目聰耳我大八洲の現態を一派の中に網羅し我靈界の活歴史たるに在ればなり

（來る七月七日第一號を發刊す）

地に平和人に恩澤あれ

發行人　平岩愃保
編輯人　本多庸一

新版書籍大賣捌

（女學雜誌社）

●木村駿吉君著
女學校用 **新編小物理學** 上製價六十五錢郵税六錢　並製同五十錢郵税四錢

右新書本社にて大賣捌致候に付地方注文へは**無郵税**にて定價のまゝ需めに應致候に付一覽ありたく尙ほ物理學は女學雜誌二百六十七號にて**細評**致候に付一覽ありたく甚有益の書と信じ申候

毎月一回發兌●一冊郵税共六錢

女學生

第十四號

女學雜誌社 發行

女學生
武道の化育……星野愼

まどひの筵
旅上母を想ふ……暗光子
春日の局……天知子
青天の鳥……可愛子
讀書の流義……假名子
祈禱、感謝……川合信水
笑ふ者よ哀む者よ、○エホバの懐ろ……方寸子
客窓書感……末次
詩人の困難……詩軒
輕跳去れよ……野雄

睦びの家
普通學の必要（上卷）……（頌榮女學校）德澤くす子
孝せばや……（東洋英和女學校）宮川すみ子
山上の殿……（女子神學校）中谷早稲子
寸陰を惜むべし……（同上）松本錦子
醜女子……（女子學院）秋野女史譯
新樹を見る……（東洋英和女學校）丹羽環子
古の文を見て……（同上）吉田ひろ子
現今我邦に要する婦人……（立教女學校）堀場いさ子

寄せぶみ
臥牛山に登るの記……（函館女學校）根本松世
愛、我を勵ませり……櫻水子
明治女學校音樂會に薙刀術を見て……のぶ

昔ばなし
述懷……不二山人

女學生仝盟各女學校は左の如し
○明治女學校○女子學院○新榮女學校○女子神學校○共立女學校○フエリス和英女學校○頌榮女學校○跡見女學校○立教女學校○成立舍女子部○女子獨立學校○海岸女學校○長榮女塾○東洋英和女學校○靑山英和女學校○金城女學校○高田女學校

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

面接日 木金兩日 后四時下

再開業 下谷西黒門町 外神田松永町

特に女學生諸君の為に別室を準備し且つ特待治療す。

渡邊泰 (女醫)荻野ぎん子 巖本善治

專門 梅毒 痔疾 子宮 痳疾

右四科ハ院長が前の大學東校梅毒院勤務中只管該患者に施療したる處にして速に全治受合なり若し全治せざれバ藥價返却す●但し診察無料

京橋銀座二丁目東仲通 畑中堂 山本醫院

いかなるちゞれけも

一度此藥を用ゆる時は美事直毛となり其

毛一代戻る事なし

本家支店染所へ御來駕あれば即坐に直し髮ゆうヰりにして差上候万一無効の時は

謝金御望み次第を呈す近來廣言を吐きにせ藥を製する者あり御注意く

新發明一種特別なる

キレー水の實効ある事世上雜多色白品の類ならず

主治大畧

性質色あざ黒あれにきび其他無名のぼつぐなまづあせもに早効あり又おしろいのちらしよくきめ濃かに美しくなる

東京神田鍛冶町廿二番地

元祖惣本家 帝國堂 山崎嘉太郎謹製

發賣店兩國米澤町大木口哲 保證店上槇町萬金膏安川

其他各地有名賣藥店に在り何卒帝國堂山崎製御改御求を乞ふ

夏日の好伴侶

農學士。寺尾熊三君著

植物學

一冊五十頁 定價金十二錢

百花咲ひ、胡蝶すら之に戯むれ遊ばんとす、人や須からく其美妙を研究し、天地の全能を歎賞すべし、此書、植物學を尤とも平易に、尤とも分り易く解明す、今の時に際して、容易く草木一沢の妙理を悟るに至極の好方便を與ふ。定價僅かに十二錢に過ぎず。

女學雜誌社出版部

廣告定價

一行	一回 (廿七字詰)	前金拾錢
同	三回以上	一割引
同	六回以上	二割引

十行以上一割引。二十行以上二割引。四十行以上三割引。但し不道徳なる事物の廣告は謝絶す慈善上の事物の廣告は社議の上無代價にて引受く女學關係の書籍は一部の寄送を乞ひ相當の廣告をなし且つ本誌に批評すべし

特別廣告は婦女に關する協會會合等の記錄を掲ぐるものにて一切無料とす但し紙面半頁分の廣告を載する毎に右雜誌十部の注文を要し以上半頁分毎に十部増の割合と定む

雜誌定價

一冊。	六錢	郵税。五厘	(但府内無郵税)
十一冊。	五拾八錢	郵税。五錢	(同前)
半年分	壹圓四拾六錢	府外は	壹圓五拾六錢
一年分	貳圓六拾錢	府外は	貳圓八拾六錢

發行所 東京市麹町區下六番町六番地 女學雜誌社

編輯兼發行人 巖本善治

印刷人 堀口庄三

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

●御藥はみがき

定價　袋入二錢　箱入四錢　鑵入八錢

口上

抑も此水晶散藥はみがきの儀は獨乙ライプチヒ府の齒科大醫エリウス、バライト氏の處方と我邦大醫某の方劑とを折衷配合せしものなれば其質精微にして齒を磨耗するの患ひなく口熱をさまし、ゆるぎ齒を固め殊に齒くそ又は諸種の「バクテリヤ」等を消滅し惡しき臭を去り口中に於ける總ての病患を未萌に防ぐの特効あり希くは大方の諸君此水晶散を御試用あつて齒牙の健全口中の清潔を計られん事を伏て冀ふ

本家賣弘所　東京通油町　三好堂謹白

明眸皓齒、花顏玉齒などゝ美人の形容には必ず齒の事を申します、されば御婦人方は常ゝ齒の清掃を欠いてはなりません、といつて無暗に粗製の齒磨を御用ひなされてはなりません、なぜなれば粗製の齒磨は齒をすりへらす力がある故終に齒の實質をすりへらし大害を釀すに至ります此齒磨は左樣ナ患ひは決してなく、口中の悪臭を去り、齒を堅牢に致しまする正眞正銘無類の好齒磨で御座り升取次所は☞に御座イ升から御近邊にて御求め下され御試しの上御好評を偏にお願ひ上げ升。

本所横網町	伊勢吉	內幸町花いかだ	近善	南神保町五	壽々木	小日向水道町	桔梗や
淺草天文原	油庄	芝神明前	きり治	同勸工場內	西むら	池の端	寶丹
通鹽町靴鞄店	三兼	赤阪一ッ木	松下	同旅籠町美妙	伊勢惣	下谷車阪	さくらか
卅間堀一	寺西	歌舞妓座內	同支店	同明神下若櫻	やまさや	下谷坂本三	三河屋
日本橋通一	小べにや	桃町三丁目	あら井	同和泉橋通	やまさや	淺草猿若三	三河屋
八丁堀長澤町	小林	四ッ谷傳馬三	山形屋	同小川町	三角堂	同駒形	中百
京橋南傳馬三	川芳	本所南二葉町	宮島	同佐柄木町	山本	同諏訪町	紅かん
同銀坐一	うの丸	神田一ッ橋通	榮樂堂	本鄕三丁目	かねやす	同黑舟町	梅家亭
						濱町一子宮玉	木原

同二丁目	三河屋
麻布笄兵衛町	いせや
同龜井町	紅や
小傳馬三	三河屋
同勸工場內	繁昌堂
鑛泉場	
伊香保	本善八郎
大磯	伊勢屋
熱海	尾張や

其他府下は勿論各地高名なる賣藥店及小間物店等に數多取次販賣仕候間御最寄にて御求被下候

特約大販賣所

日本橋區馬喰町一丁目　小間物問屋　三河屋善兵衛
同區横山町一丁目　小間物問屋　近江屋源七

日本橋區馬喰町一丁目　同町水本舖　平尾賛平
同區横山町一丁目　小間物問屋　中村喜三郎
仝　柏屋善造
仝　龜屋忠兵衛
同區大傳馬町二丁目　小間物問屋　勝田五兵衛
同區橘町二丁目　小間物問屋　柏屋粂七
同區村松町　諸家賣藥舖　岩浪長造
甲府市柳町　小間物問屋　丸茂平兵衛
水戸市上市大工町　小間物問屋　市毛松兵衛